
続・モンスターハンターへようこそ！

ればー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

続・モンスターハンターへようこそ！

【Nコード】

N04060

【作者名】

ればー

【あらすじ】

高校生の蓮斗はモンスターハンターの世界に入る事を望んだ

ハンターとの出会い（前書き）

全2部からなる「ようこそ！モンスターハンターへ！」の続編
ゆえに実質3話目

ハンターとの出会い

ようやくキャンプに辿りついた時には俺の身体はボロボロだった
歩くのもままならない状態の俺の視界に青く四角い物体が映った

蓮斗「あれは・・・支給品ボックス！」

俺は身体の痛みを忘れて駆け寄った

そして中から緑色の液体の入ったビンを取り出すと一気に飲み干した
蓮斗「ぷはぁ・・・生き返るぜえ」

不思議なことにそれを飲んだ瞬間からみると身体に力が戻って
くる

これが回復薬か、現実では到底味わえない感覚だな

男「おい！」

俺は背後から聞こえてきた怒鳴り声に驚いて振り向いた

そこには鉄の防具に身を包んだ長身の男がいた

こいつ・・・ハンターか？

それもそうか、ハンターがいなかったらこの支給品ボックスがある
わけないもんな

蓮斗「あーあのこれ、その・・・」

俺は何と説明したらいいのか分からなくてまごついた

男「オレの支給品を！」

その男は俺に歩み寄った

男「第一お前は誰なんだ！？オレのクエストを邪魔しようつたって
そうはいくか！」

このノツポ・・・人が黙って聞いてれば・・・

蓮斗「うるせー！こちとらこんなとこに迷い込んで迷惑してんだ！
ギャーギャーわめくんじゃねえ！！」

その男は俺の迫力に驚いた様子だった

男「いい度胸してるじゃねーか・・・お前ハンターか？」

俺は何も考えずに即答していた

蓮斗「そうだ」

男「迷い込んだんだってな、ギルドには所属しているのか？」

蓮斗「いいや・・・」

男「ならこの船に乗れ、俺の村に連れて行ってやる」

男はそう言つと足早に船に乗り込んだ

蓮斗「ああ、ありがとう・・・その・・・」

男「ナオヤ・スネ・ジャングルネ」

蓮斗「え？」

ナオヤ「俺の名だ」

ナオヤはそう言つと船へ乗り込んだ

ナオヤ「さ、出航だ」

船は鮮やかな海に緩やかな波紋を作りながら密林を後にした後でこつそり納品ボックスを覗くとそこには特産キノコが入っていた

いざ初クエストへ!! (前書き)

実質4話目

いざ初クエストへ！！

ナオヤ「ここだ」

ナオヤ・スネ・ジャングル・ネことナオヤに連れてこられた場所は密林とまではいかないが緑が豊かな小さな村だった

蓮斗「ここがあんたの村か」

ナオヤ「マスク村」

蓮斗「え？」

ナオヤ「この村の名だ」

ナオヤ「ちよつと待っててくれ」

ナオヤはそう言つと村の中心にいる村長と思わしき老人の元へ向かった

何やらペコペコ頭をさげている

あつ

杖で頭を叩かれているぞ

それに何やら怒鳴られているようだ

しばらくすると村長は集会所と思わしき建物に入り込みドアを勢よく閉めた

ナオヤはしばらくうつむいていたが俺の存在を思い出したのかこちらへ向かってきた

ナオヤ「おう、村長に掛け合ってみたらお前を置いてくれるそうだがあ俺が頼めばこんなもんだ」

蓮斗「そうか、礼を言う」

ナオヤ「なあに、いいってことよ」

蓮斗「じゃあちよつと村の人たちに挨拶でもしてくるか」

ナオヤ「俺はしばらく家で休ませて貰う、ハードなクエストでクタクタだぜ」

ナオヤはそういうと村にある一番小さな家に入って行った

さて、やはりまずは村長に挨拶すべきだろう

俺は集会所へ向かった

ドアを開けると受付と老人の2人きりだった

2人が一斉にこちらを見る

蓮斗「ああ、えーと、ナオヤの紹介でこちらにお世話になる蓮斗・

クル・パーマネットです」

村長「あのハンターを世話するだけで手いっぱいだっていうのに・

・」

受付「まあまあ」

村長と思わしきオッサンが文句を言い受付の若い男がそれをなだめる
どうやらあまり歓迎されていないみたいだな

それもそうか、こういきなりじゃ

村長「ワシは村長のオカ・シモじゃ」

受付「ボクは受付のケン・ハイ・ストマツチ、ケンでいいよ」

モンハンの受付といったら可愛い受付嬢じゃないのか？

まあいい

オカ「さっそくだがあなたには悪いが腕試しとしてクエストに行っ
てもらう、これであんたを村に置くかどうか決めさせて貰う」

蓮斗「な、なんだって!？」

ケン「準備ができたらまた来てね」

やれやれ、面倒なことになったな

まあナオヤをサポートとして連れて行けば問題なくクリアできるだ
ろう

俺は集会所を後にすると武器屋に行った

武器と防具がないなんてハンター以前の問題だ

蓮斗「こんにちは」

武器屋「おう、新入りか」

蓮斗「はい、蓮斗・クル・パーマネットです」

武器屋「俺はミノ・ムラだ」

蓮斗「ところで武器なんですが・・・」

ミノ「おう、どうするんだい？」

蓮斗「それが金がなくて・・・」

ミノ「・・・」

蓮斗「出世払いということで貸して貰えませんか？」

ミノ「悪いがそれはできないね、素材がないことには生産できない」

それもそうか、あれだけプレイしたゲームのシステムをすっかり忘れてしまっていた

まいったな・・・これからクエストだつてのに

ミノ「・・・一応装備一式ならナオヤの住んでいる家にあるぞ」

蓮斗「え？そうなんですか！？」

ミノ「ああ・・・昔この村にいたハンターが使っていた防具がな・・・」

・

蓮斗「昔いたハンター？」

ミノ「ああ、リモ・リマ・ズーボっていうそれはもう腕のいいハンターだったんだ」

蓮斗「でも今は・・・」

ミノ「伝説のモンスターとやらに会いに行つてそれつきりさ」

蓮斗「伝説のモンスター・・・」

ミノ「まあ、そういうこつたから気が向いたら使いな」

俺は武器屋を後にした

ナオヤの家に入るとナオヤはベッドの上でいびきをかいていた

アイテムボックスを覗くとそこには確かに防具が一式揃っていた

ナオヤがなぜ使わないのかと思つたが、どうやらこれはガンナー用防具のようだな

どれ、装備してみるか

ん・・・

なかなかいい着心地だ

防具はガノトトス一式

武器はライトボウガンのメイルシュトローム、こちらもガノトトスだ
この武器は装填数は少ないもののほぼ全ての弾を使用できる優れものだ

ちなみにナオヤの防具はバトル一式

武器は大剣のブーンブレイド改、採集だけで作れる下位武器だ
それから俺はアイテムボックスからクエストで使いそうなアイテム
を一通り入手した

いい感じだ

さて、もう準備もできたことだし腕試しとやらにいつちょ行ってみ
つか

蓮斗「おい、ナオヤ」

ナオヤ「ぶび・・・んに？」

汚い寝顔だ

蓮斗「クエストに付き合ってほしい、集会所に来てくれ」

俺はそういうと家を後にした

後ろからナオヤの何か言う声が聞こえたがシカトした

俺が集会所についてしばらくするとナオヤが入ってきた

ナオヤ「おい！俺にクエストについて・・・あ、村長こんにちはで
す」

蓮斗「やつば迷惑だったか？」

ナオヤ「いやそんなことはない、サポートは得意だ」

オカ「それではクエストを指定する」

ゴクリ・・・

ナオヤ「まー俺がいればそんじょそこらのモンスターなんて」

オカ「イヤンクックク狩猟だ」

ナオヤ「よゆ・・・え？」

ナオヤの顔色が変わる

なんだクツクか、まあこの装備なら何とかなるだろ

ナオヤ「いや村長、それはちょっとまだ、ほらこの新米ハンター君
には早いと思うのですが、だって、いや、え？」

オカ「期待しているぞ」

村長オカはそう言うつと集会所から立ち去った

蓮斗「よし、行くか！」

ナオヤ「え、いやちょっとまてよ、クツクだぞ？」
蓮斗「何か問題でも？」

ナオヤ「お前何も分かってないな！あのな・・・」
ケン「頑張ってきてね」

蓮斗「おう！」

ナオヤ「え、ちょまつ」

こうして俺たちは初クエストに出発した

怪鳥VSクルモジャハンターズ（前書き）

実質5話目？

蓮斗の名前が変わっている疑惑がありますがその理由は後ほど

怪鳥VSクルモジャハンターズ

蓮斗「やってきましたまた密林！」

俺は美しい緑と青に挟まれたスタート地点で叫んだ

これから自分の身に起きることを考えると自然とテンションも上がるあれだけ大好きなゲームの中に入って実際にハンター生活ができるなんて！

ナオヤ「おい！早くしねーと応急薬全部貰うぞ！」

蓮斗「悪い、待ってくれ」

俺はそう言つと応急薬と携帯食料をもらった

ナオヤ「密林のことなら任せろ、俺はあの村で一番詳しいぞ」

そりゃそうだ、ハンターがあんただけだからな

俺はそのセリフをぐつと抑え込むとエリア4に向かった

ナオヤ「おい！どこへ行く！」

蓮斗「クツクは開始直後にエリア4で待つのがセオリーだろ」

ナオヤ「え？お前何言つて・・・」

俺はエリア4へ向かった

うーん、絶景だな

透き通るほど美しいブルーの海にサラサラの砂浜

そして気が遠くなるような水平線、PCの画面で見るとはわけが違ふ

それから地面から噴き出る煙・・・ん？

ナオヤ「気をつける！！！」

蓮斗「わっ！」

いきなりでかい声を出すな馬鹿

ナオヤ「あの煙の下にはヤオザミという小型モンスターが潜んでいる、小型だと言つて油断はするな、地面からの奇襲にうつかり引つかかると相当な深手を負うハメになるぞ、俺も引つかかったことがあるがそのときは死にかけた・・・陸にでてきてからも油断はでき

ない、奴の移動スピードはそこの小型モンスターとはわけが違う、かなりのスピードに加え手数も多くてしつこさも兼ね備えている・・
・強敵だぜ」

俺はボウガンをリロードし通常弾レベル2を装填した
そして砂煙の近くを踏み鳴らした

ナオヤ「おい！お前人の話聞いてんのか！！」
ザクッ

砂中からハサミが飛び出した

俺はボウガンを構えると弾を撃ち込んだ

蓮斗「うおっ」

思わず反動で尻もちをつく

蓮斗「いてて・・・」

俺が立ち上がるとそこには全身を砂から出したヤオザミの姿があった

デカイ・・・

思わず怯んだ俺に向かってヤオザミが突進してきた！速い！

蓮斗「あ・・・あ・・・」

思わず目をつむる

ナオヤ「うぎゃああああああああああああああああああああ
ああああああああ」

背後からの悲鳴に思わず目を見開く

振り向くとそこにはヤオザミに追いかけているナオヤがいた
そっちか！

俺は慌ててボウガンを構えるとヤオザミに連射した

蓮斗「ぱあああああま！」

ヤオザミが倒れる

やった！

ナオヤ「これでも喰らえ！！！」

それからナオヤがボーンブレイドをヤオザミに振り下ろす
弾かれる

・・・どうやらヤオザミを倒したようだ

ナオヤ「やった！うひょ！ヤオザミ倒しちゃった！見た！？今の！
俺の一撃を！？」

凄いはしゃぎようだ

まるでヤオザミを始めて倒したかのような

きつと後輩ハンターにいい所を見せられて嬉しいんだろう

さつそく剥ぎ取らせて貰おう

意外とハンターってハードなんだな

俺はそんなことを思いながらヤオザミから剥ぎ取った素材を眺めて
いた

ナオヤ「それにしても今の一撃さ！見たよな！あの俺の・・・ん？」

ナオヤの話が中断される

辺りが急に暗くなったのだ

蓮斗「何だ？」

俺は上を向いた

そこにいたのは

ナオヤ「い・・・いいいいイャンクック！！！！」

すっかり忘れていたぜ！今回のメインはこいつだ！

俺は走ってクックから距離をとった

ナオヤ「おい！逃げんのか！」

蓮斗「俺はガンナーだ！近距離は頼んだ！気を引いてくれ！」

ナオヤ「え」

ばふうん

イャンクックが着陸する

生で見ると凄い迫力だ、これが竜・・・

キエエエエエエエエ

クックの雄たけびがエリア4に響き渡る

ナオヤ「びえ・・・」

思わずキャンプに逃げ出すナオヤの背中にクックの突進が炸裂する
キエー！

ナオヤ「ぶわあああああ」

蓮斗「ナオヤ！」

俺はすかさずボウガンを構え弾を連射する

蓮斗「喰らえ！貫通弾を！」

バシユビシユドブシユ！！！！

次々とクツクにヒットする

キエエ・・・

おお！怯んだぞ！いける！

ナオヤ「この野郎！今だ！」

剣を振りかぶり溜め動作に入ったナオヤにクツクの尻尾回しが炸裂する

ナオヤ「んぎ」

数メートル吹っ飛ばされたナオヤは身動き1つしなかった

蓮斗「ナオヤ！」

するとナオヤはどこからともなく現れたアイルーの手によってキャンプへ運ばれた

キエー！

息をつく間もなくクツクがこちらへ向かって突進してくる

蓮斗「うおおっ」

俺は海の中へダイブしてしまった

間一髪だ・・・あんなのにあたったらナオヤの二の舞だぜ

そして俺は隙を見て弾を撃ち込んだ

ギエエエエエエエエ！！！！

おお！？

クツクが興奮したように翼をばたつかせる

いわゆる怒り状態ってやつか

ギエー！ギエー！ギエー！

火の球を吐き出す

だがガンナーの俺には届かない関係ない

蓮斗「この勝負・・・貰った！」

俺はさらに貫通弾を顔面に打ち込み続けた

キエ・・・

怯んだぞ！もう少しだ！

ナオヤ「どりゃあああああああああ！！」

その時だった

復帰したナオヤがクツクの顔面に向かって大剣を振り下ろす

ナオヤ「さすがに顔面は弾かれないだろう！どうだ！」

キエエ・・・

おお！効いているようだ！

俺も負けてられん！いくぜ！

カラツカラツ

蓮斗「え？」

しまった！貫通弾は弾切れだ！

俺は急いで通常弾へ切り替えると急いで構えなおした

俺の前にはクツクが迫っていた

蓮斗「もふあっ」

俺は吹き飛ばされた

う・・・

目の前が霞む

遠くには雄たけびを上げるクツクの姿があった

もうダメか・・・そう思った時だった

何かがポーチから転げ落ちた

これは・・・応急薬！

慌ててそれを口にする

蓮斗「んぐ・・・んびっ・・・ぷはっ！」

みるみる力がみなぎってくる

ナオヤ「危ない！」

蓮斗「ほおっ」

俺は間一髪でクツクの追撃を回避すると

さらに通常弾を撃ちまくった

蓮斗「喰らえ！どりゃ！」

ギエ・・・キエ・・・

すると起き上がったクツクは足を引きずりながら歩き出した

蓮斗「これは・・・!」

瀕死だ!クツクは瀕死だ!

ナオヤ「逃がすかよお!」

そう言うとなオヤは止めをさしにクツクへ突進した

ギエエエエエエエエエ!!

!?

そんなナオヤを見たツクツクは最後の悪あがきとでもいうようにナオヤに炎を吐きかけ突進というコンボをかました

ナオヤ「びえ・・・」

するとどこからともなく現れたアイルーが・・・

ついさっきも見た光景だ

蓮斗「うっ」

俺は風圧で怯んだ

蓮斗「しまった!」

俺がナオヤに気を取られているうちに逃げられてしまった

あと一歩だったってのに・・・

まあいいさ

確かクツクの巣は6番だったな

俺はエリア3と8を経由するとエリア6へ急いだ

途中でブルファンゴやランポスに襲われかけたが今構っている暇はない

エリア6に近づくにつれ大きないびきが聞こえてきた

どうやらクツクは寝ているようだな

早くしないと

アイツが来る前・・・じゃなくてクツクが回復する前に

自然とエリア6に向かう足が速くなる

エリア6ではクツクがデカイいびきをかいて寝ていた

よく自分のいびきで目が覚めないなコイツ

こちらへんかな

俺がクツクの前でボウガンを構えたその時だった
ナオヤ「ここは俺のレベル3に任せろ！」

来た

蓮斗「・・・頼んだ」

ナオヤ「いくぜこらあああああああ！！」

キエ・・・？

蓮斗「あ」

キエエエエエエ！

クツクが雄たけびを上げる

ナオヤ「どりゃあああああああ！！！！」

ドシュツ！

ナオヤのレベル3斬撃がクツクの顔面と真ん中に見事炸裂した！

キエエエエエエエ！！

ナオヤ「ひっ」

蓮斗「くそっ！」

俺は慌ててボウガンを構えたが遅かった

クツクはナオヤに突進した

吹き飛ばされるナオヤ

あと一撃喰らったら・・・まずい・・・！

俺は必死に貫通弾を撃ち込んだ

死んでくれ！頼む！こつちを向け！せめて怯んでくれ！

俺の頼みも虚しくクツクは再びナオヤに突進を始めた

目と口を見開いたナオヤ

虚しく空を突き抜けてゆく貫通弾

終わった・・・

そう思った

その時だった

突如2つの人影が現れナオヤとクツクの間に立ちはだかった
そして1人がクツクの突進をガードした

1人がクツクの頭にハンマーを叩きつけた
キエ・・・キエエエエ・・・
断末魔を上げ倒れ込むクツク
倒した・・・のか？
俺とナオヤの前に立ちふさがる2人の人影
こいつらは・・・一体！？

凸凸コンベ（前書き）

かの有名な名探偵江戸川コナンは名を名乗る際とつさに小説家の名前を組み合わせたそうなの

凸凸コンビ

ナオヤ「う．．．」

蓮斗「大丈夫か？」

俺はキャンプでナオヤの手当てをしていた

クエストは無事クリアしたが腕試し的にはどうなのだろうか

俺は振り返った

そこにいるのは2人の男

片方を見るからにデブでもう片方は小太りだ

デブはババコンガ装備一式にイカリハンマー

小太りはイーオス装備一式に片手剣のデッドリイポイズンを装備している

装備からして俺らよりは多少出来るハンターのようにだ

デブ「どうやらギルドの連絡が遅れてクエストが重複してしまったらしいな」

小太り「すまないことをしたよ」

蓮斗「いや助かった、礼を言う」

複雑な心境だが今は礼を言っておこう

デブ「オレはアッシ・ルテデ・ラハ」

小太り「ボクはベア・イン・ハムレット」

そついうと二人は俺たちを見た

蓮斗「俺は蓮斗・クル・パーマメント、こいつはナオヤ・スネ・ジヤングルーネ」

ベア「ボクたちはホワイト・ピジョンから来たんだ」
聞いたことのある名だ

確か貿易が盛んなデカイ街だ

蓮斗「俺たちはマスク村だ」

アッシ「ほう、マスク村か！オレたちの街の隣じゃないか！」

ベア「隣と言っても一番近いだけでかなり距離はあるけどね」

蓮斗「そうか、ところで報酬だが・・・」

アッシ「ああ、お前たちにやるよ、俺たちは何もやっちゃいないからな」

蓮斗「そうか、すまない」

ベア「謝るのはボクたちのほうさ、邪魔して悪かったね」

そういうと2人は船に乗りホワイト・ピジョンへと帰って行った街か・・・いずれ行くことになりそうだ

ナオヤ「ふん・・・気に入らん奴らだ」

目覚めていたのか

ナオヤ「俺の獲物を横取りしやがって、街だかなんだか知らんが偉そうに」

偉そうなのはお前だ

蓮斗「さあ、俺らも帰ろう」

マスク村へと帰還した俺は報酬と素材を受け取り滞在を認められたオカ「まさかクックを倒せるとは、これからもよろしく頼むよ」

ケン「行きたいクエストがあつたらいつでもきてくれよな！」

そういえばアイテム屋にいつてなかったな

ガンナーは弾が命だからクエスト後には毎回調達しにいかない

俺はアイテム屋を訪れた

青年「チャオ！今ならアイテム10%割引中アル！」

やたらとテンションの高いこの男がこの店の店主らしいな

蓮斗「蓮斗・クル・パーマメントです、この村に滞在することになったんでよろしく」

青年「おー、僕はカン・チャン！よろしくアル！」

蓮斗「じゃあ、通常弾とそれから・・・」

俺はアイテムを調達すると家へ行った

ナオヤ「おう、次は俺のクエストに付き合ってもらっぜ、明朝出発だ」

蓮斗「わかった」

ナオヤの武器を見るとボーンブレイド改がボーンスラッシャーに強化されていた

武器から推測するにおそらく明日はリオレウスだな
まったく勝てる気がしない

正直行きたくないがこちらが付き合わせたのだからそうはいくまい
俺はさっさと疲れを癒し明日に備えることにし、寝た

ナオヤ「閃光玉よし、けむり玉よし、あとは罨か、えーと・・・」

俺はナオヤの独り言で目を覚ました

最高の夜明けだが最悪の目覚めだ

蓮斗「よそよそしいな」

ナオヤ「そりゃそうだ！今日は飛竜狩猟だぜ！」

やっぱりな

蓮斗「そうか、まあ俺は準備できてるからいつでもオツケーだぜ」

ナオヤ「こやし玉をやめて薬草に・・・」

聞いちゃいない

結局ナオヤの準備が終わったのは昼近くだった

集会所で昼寝をしていた俺はひきつった顔のナオヤに起こされた

蓮斗「ほんとに行くのか？リオレウス」

ナオヤ「当たり前だ、あいつを倒してこそ一人前のハンターだろ」

昨日の一件で自信をつけてしまったらしい

オカ「よく考え直せ、飛竜じゃぞ！？」

ナオヤ「大丈夫ですよ、何せイヤンクックを倒したんですから！」

昨日の助っ人の話はケンには話したが村長は知らないのだ

そもそもクックとレウスじゃわけが違うけどな

ナオヤ「行くぞ！」

ケン「蓮斗、ちょっと」

蓮斗「ん？」

ケン「さすがにリオレウスはまだ早いと思うからそれなりの処置は
しといたよ」

村長は必死にナオヤを止めようとしていたがナオヤはそれを振り切り出発した

俺も後を追う

ケン「行つてらっしゃい」

オカ「ああ・・・」

jungles in hill

俺は辺りを見回した

何度も言うようだが相変わらずの絶景だ

森丘ステージなんて今まで腐るほど見てきたがやはり実際に目の当たりにすると格別だ

頭上を覆う木を通して降り注ぐ木漏れ日さえ身に染み・・・

ナオヤ「おい！早くしねーと応急薬全部貰うぞ！」

蓮斗「悪い、待ってくれ」

俺はアイテムを受け取るとボウガンに弾を装填した

ナオヤ「よっこらせ」

蓮斗「その火に生肉おいても肉は焼けないぞ」

ナオヤ「！？」

キャンプを後にした俺はマップを取り出した

蓮斗「とりあえずエリア9で待つか」

ナオヤ「お前変なことに詳しいな」

俺らはエリア9へと向かうことにした

エリア2へいくとランポスがいた

ナオヤ「い、いくぜ！」

明らかに腰が引けている

蓮斗「こんな奴相手にしてないでさっさと行くぞ」

ナオヤ「てえい！！」

ズバツ

キャエー

ランポスが吹き飛ぶ

ナオヤ「・・・やった！！！」

気持ちの持ち方って大切なんだな

俺はこの一件でそれを学んだ

エリア3につくとナオヤが駆け出した

そしてがつつくようにキノコを集め始めた

ナオヤ「特産キノコ！」

蓮斗「おいおい」

ナオヤ「ふん、モンスターの素材を取るだけがハンターじゃないんだぜ」

まあその通りだが

キノコのような特産品を持ち帰ればギルドから直々の報酬が貰えるし
蓮斗「じゃあ俺は先に行って・・・」

ナオヤ「ぴぎゃあああああああああ」

振り返るとそこには刃物を持った小人とアイルーに運ばれるナオヤの姿があつた

ち・・・チャチャブー！！

キノコに擬態していたのか！

こいつのヤバさはモンハンをやったことのあるやつなら誰もが知っているだろう

俺はチャチャブーに気づかれる前に急いでエリア9へと移動した

蓮斗「ふう・・・いてっ」

背後から何者かにどつかれた俺は尻もちをついた

蓮斗「何だ！？」

慌てて振り返るとそこにいるのは俺の世界の猫と比べるとやや大きめの黒猫だつた

こいつは・・・メラルーか！

・・・ん？

物を盗む憎らしい奴だが近くで見るとなかなか可愛いじゃないか
大きくてクリクリした愛くるしい瞳にふさふさの毛並み、それに・

・
つてそんなことを考えている場合じゃない！

俺は痛む心を押さえながらその場にいたメラルーたちに弾丸を乱射した

蓮斗「ふう・・・」

安心しかけたそのときだった

何かが羽ばたく音がだんだんと近づいてくる

そしてそれは俺の頭上で止まった

来たか！

俺は距離をとるとボウガンを構えた

どうすん

現れたのはリオレウス

蓮斗「な・・・」

あまりの迫力に思わず身体が固まる

イヤンクツクなんて比じゃない

俺はこのとき初めて本気で命の危機を感じた

勝てるわけがない！

逃げようと駆け出した俺の背後で雄たけびが聞こえた

ギャオース！！

蓮斗「ひっ・・・」

振り返るとリオレウスがこちらに突進してくるのが目に入った

速いデカイ！まるで戦車だ！戦車みたことないけど！

俺は目に入った小さな穴にとっさに飛び込んだ

ここまでは入ってこれないだろう

やつがエリア移動するのを待つか・・・

ナオヤ「待たせたな！！」

遠くのほうで最も聞きたくない声が耳に飛び込んだ

蓮斗「ああ・・・」

ナオヤ「飛竜だか火竜だか知らんが今の俺・・・」

どうやらレウスに気づいたらしい

ナオヤ「びえ・・・」

きつと腰を抜かしているに違いない

俺は穴から飛び出すと持ってきていた角笛を吹いた

クツクの一件で学習した俺は角笛を持参していた

案の定腰を抜かしているナオヤに突進しかけていたレウスはこちら

を向いた

蓮斗「逃げる！」

ナオヤ「け・・・毛・・・」

クソ・・・！

俺はもう一度角笛を吹いた

レウスは完全にこちらに向き直った

その口元にはうっすらと炎が見える

終わった・・・

俺は覚悟した

レウスが口を開け首をのけ反らす

その時だった

辺りが閃光につつまれた

アッシ「まったく世話の焼ける」

ベア「こつちだ！」

突如現れたアッシとベアに促されるまま俺たちはエリア9を脱出した

アッシ「まったく・・・」

ベア「いくなんでもまだレウスは早すぎるでしょ、ボクたちでさえ倒したことないのに」

蓮斗「ああ、全くその通りだ」

俺はエリア10の池でパンツを洗っているナオヤに目くばせをした

アッシ「受付のケンとやらに感謝するんだな」

蓮斗「ケンに？」

ベア「昨日ボクたちに伝書鳩が飛んできてね、君たちのサポートを頼まれたんだ」

ケンがクエスト前にいていたそれなりの処置ってのはこれのことか

蓮斗「すまない、また助けられたな」

アッシ「気にするな、それじゃ」

ベア「帰ろうか」

蓮斗「え？」

アッシ「おいおい、まさかお前・・・」

そうだそのまさかだ

俺はあのリオレウスを眼前にし死にかけた
しかしそれでも諦めきれなかった

蓮斗「俺は諦めない、君たちは帰っていい」

ベア「な、なんだって・・・？」

蓮斗「俺は一刻も早く一人前のハンターにならないんだ」

リモ・リマ・ズーボ、彼が探し求めていた伝説のモンスターとやらに元の世界に戻る鍵がある、俺はそう確信していた
アッシ「好きにしな、俺たちは命が惜しいんでね」

そういうと2人はエリア10を去って行った

ナオヤ「お、おう・・・」

ナオヤがこちらへ寄ってきたがいつもの威勢がない

蓮斗「さっきまでの自信はどうした？」

ナオヤ「・・・」

蓮斗「いくぞ」

ナオヤ「え？」

蓮斗「イヤンクックのときだってそうだ、俺たち2人が力を合わせれば倒せないモンスターなんていないさ」

ナオヤ「無茶だ・・・」

蓮斗「このまま帰ってどうする？笑い者だぜ」

ナオヤ「・・・」

蓮斗「そうか、お前はその程度のハン・・・」

ナオヤ「しょうがねえ、お前だけじゃ心配だからな」

蓮斗「よし！作戦を考えよう！」

ナオヤ「ふん、それならもう考えてある」

蓮斗「ほう」

ナオヤ「まず奴に気づかれないうちに落とし穴を仕掛ける、それから閃光玉、そしてリンチだ！」

偉そうに言った割には普通だが黙っていろいろなところから俺たちはエリア4へと向かった。・・・レウスだ！

蓮斗「よし、落とし穴を頼む！」

ナオヤ「え？俺が仕掛けるの？お前行けよ」

やはりそうきたか

しょうがない

俺はレウスの後ろから気づかれないように近づき落とす穴を仕掛けた俺はナオヤのほうに向き直るとVサインを送った

ナオヤ「よつつつ!!!」

ナオヤが思いっきり叫ぶ

するとこちらに気づいたレウスは雄たけびを上げながら突進してきた

俺の目の前に迫るレウス

俺はそれを余裕で眺めていた

ズボ！

俺の眼前で落とし穴にはまるレウス

慌てて抜け出そうと上半身だけで暴れている

辺りをつつむ閃光

動きを止めるレウス

蓮斗「いっけええええええええええ！！！」

俺は得意の貫通弾を連射しまくった

ナオヤ「よっ……!!」

ナオヤの溜めレベル3がレウスの脳天に直撃する

ギ
ャ
ア
ア
ア
ス

レウスの悲痛の叫びが木霊する

いける！

俺はそう確信し徹甲榴弾を装填した

とっておきの弾だ

こいつで・・・キメる！

俺が構えてスコープを覗いた時だった

レウスが落とし穴から飛び上がると勢いよく着地し絶叫した
ギョオオオオオオオオ

どうやら怒り状態になったらしい

至近距離にいたナオヤはあまりの轟音に耳を塞ぐ

それからレウスはナオヤに突進をかまし吹き飛ばした

ナオヤ「んぎ」

そして空高く舞い上がる

俺は慌ててレウスの真下へ逃げ込む

蓮斗「大丈夫か!？」

ナオヤ「溜まんねえぜ・・・こいつは俺のハンター魂をどこまでも
刺激してくれる!」

あ、壊れた

ナオヤ「こいやああああ!」

そういうとナオヤは走り出した

そんなナオヤにスポットライトが当たる

ナオヤ「え？」

ナオヤが驚きの表情で頭上を見上げたと同時にプレスが直撃した
黒焦げになり吹き飛ばすナオヤ

慌てて現れ焦げた塊を運ぶアイルー

俺はそれを啞然として見ていた

しかしそれもつかの間、レウスが着地をすると俺に向き直り突進を
してきた

は・・・速い!

こんなの避けられ・・・

蓮斗「うばああああああ」

俺は勢いよく吹き飛ばされた

レウスを見ると俺を睨みつけ威嚇をしているようだった

まずい・・・回復を・・・

俺がポーチに手をつ突っ込むよりも早くレウスの尻尾が飛んできた

蓮斗「ぐう」

勢いよく吹き飛ばされた俺の意識はもはや朦朧としていた
俺もここまでか・・・

ナオヤ「蓮斗！いま行ぶっ」

復帰したナオヤが走りよるがレウスの尻尾に弾き飛ばされ俺の隣へと倒れ込んだ

そしてもう一度尻尾が飛んできた

俺は目を閉じた

そして覚悟を決めた

ナオヤ「もげっ」

・・・

・・・ん？

目を開けるとそこにはレウスの尻尾につぶされたナオヤの姿があった
ただしその尻尾は根元あたりから切断されていた
遠くには尻尾を切断され痛みにもがくレウスの姿
目の前には見覚えのある人影があつた

ベア「やつぱり見捨てられないよな」

アッシ「ギルドへの言い訳は何て言おうか」

蓮斗「お・・・お前ら・・・」

ベアがポーチから取り出した粉を飲み干す

すると不思議と俺とナオヤにも力が沸き起つた

ナオヤ「4人パーティーだ、行けるな？」

それはお前のセリフじゃない

俺は怒り狂っているレウスを見据えると深呼吸をし

ボウガンを構えた

蓮斗「いくぜ！！！」

w e l c o m e t o N S J (前書き)

訳：遠い昔、はるか彼方の銀河系で・・・

w e l c o m e t o N S J

それからであつという間だった

先ほどのまでの苦戦が嘘のようにスムーズな戦闘だった

俺が毒弾を撃ち込み体力を削り

ベアが立ち回りでレウスを翻弄し

アッシがレウスをスタンさせ

レウスがダウンするとどこからともなく現れたナオヤが加わり総攻撃
人数が4人だと高難度クエストもここまで楽になるものなんだな

俺は足元に倒れているレウスを眺めながら思った

一進一退の攻防の末

俺たちはついにあのリオレウスを倒したのだ

アッシ「見なおしたぜ、新米かと思いきや中々やるな」

ナオヤ「お前もな」

ここに妙な友情が芽生えたようだ

ベア「さて、素材も剥ぎ取ったことだし、行くか」

アッシ「そうだな、次の街へと」

蓮斗「うん？」

アッシは遠い目をして言った

アッシ「今回の件で俺たちは街のギルドを追放されるだろう、だからあの街を出るのさ」

ナオヤ「どんまい」

蓮斗「いや待てよ、何で追放なんて・・・」

ベア「無断で他の村のクエストに参加してタダで済むほどボクらの
ギルドは甘くないのさ」

ナオヤ「NSJへ来いよ」

アッシ「え？」

ナオヤ「ナオヤ（N）・スネ（S）・ジャングルーネ（J）、俺の
名を冠したギルドだ」

ベア「つまり君たちの村へ来いと？」

蓮斗「そりゃいいや、お前たちなら大歓迎だ」

ナオヤ「NSJはまだ正式なギルドじゃないし、メンバーも2人だがいずれデカくなる」

そんなのがあつたなん・・・って、え？

メンバーが2人？

それって・・・

蓮斗「おいナオヤそのメンバ・・・」

アッシ「礼を言う」

ベア「御言葉に甘えることになりそうだ」
ちよまつ

ナオヤ「ようこそ、NSJへ」

そして俺たち4人はマスク村へと帰還した

ナオヤ「おい！なあ！見ろよこれ！ふひっ！」
・・・うるせーな

朝っぱらに寝ている俺を叩き起こしたナオヤが持っていたのはレッ
ドウィング

先日のリオレウスの素材を使って強化した大剣だ

今日になってやっと完成したらしい

ナオヤ「ついに俺も竜素材を使った武器を持てるように・・・お前
が来てからいいことだらけだぜ！」

妙にテンションの高いナオヤにイラつきながらも俺は起床した

ベア「よう」

外に出るとアイテム屋のカンと親しげに話しているベアの姿があつた
アッシ「おう」

俺に続いて家から出てきたアッシは集会所へと向かった

この2人も大分この村になじんできたようだ

ナオヤ「ということだな、火が弱点のモンスター狩猟へ行こうと思
う」

後ろから耳障りな声が聞こえてくる

蓮斗「というと？」

ナオヤ「フルフルなんてどうだ？」

蓮斗「いやだよ」

ナオヤ「おう、サンキュ・・・え？」

蓮斗「寒い」

ナオヤ「ぬあんでだよ！お前らのクエストに散々付き合ったる！」

レウスを倒してから俺たちは防具や武器を強化するために様々なクエストへ行っていた

ハンターとしてのレベルもこの短期間で数段にアップしただろうちなみにナオヤは勝手に付いてきたと言ったほうがしっくりくる

ナオヤ「俺達って仲間じゃねーの！？協力するだろ普通！？」

・・・まったく、しょうがねーな

蓮斗「ベアとアツシの2人にも聞いてみる」

あの2人ならきつと断るだろう、今更フルフルなんて

アツシ「いいぜ、改に進化したイカリハンマーの威力を思い知らせてやる」

ベア「ボクもちょうど強化したプリンセスレイピアを使ってみたかつたんだ」

ええ・・・

ナオヤ「おし、じゃあ今夜出発だ！」

まあガンナーでのフルフルはかなり楽なことだしまあいいか

ナオヤ「次の防具はフルフルにしようかな・・・うひ」

俺は装備を整えると夜に備えて睡眠を取ることにした

フルフルの弱点は火で部位破壊が出来るのは頭と身体で・・・
そんなことを考えているうちに俺は心地よい暗闇に包まれた

・・・あ・・・くあ・・・白亜！

俺は目を覚ました

ここは・・・？

辺りを見回すとそこは見慣れた光景だった

ここは俺の通う白鳩高校・・・？

そして俺の席だ

男「白亜！起きろ！お前の番だぞ！」

そうだ、俺の名前は白亜蓮斗

どこかで見たことのあるような男が前方で怒鳴っている

蓮斗「え？ここは？何だ？」

俺は辺りを見回した

横の席を見るとそこには男が座っていた

男「456ページ123行目の英訳だ」

蓮斗「お・・・おう」

俺は促されるままにそのページのその行を読んだ

蓮斗「えー、Along time ago in a gal
axy far, far away・・・」

教師「正解だ、次」

ここは・・・？

そうだ・・・俺は白亜蓮斗・・・

男「大丈夫か？気分悪そうだが」

蓮斗「ああ、大丈夫だ」

何か大切なことを忘れている気がする

しかしそれが何なのかは思い出せない

男「そういえば、モンハンのアップデートだけどさ」

モンハン・・・アップデート・・・？

そうだ、俺はマスク村で・・・

俺の名前は・・・

ナオヤ「蓮斗・クル・パーマメント！」

ナオヤの怒鳴り声で目を覚ました

外を見るとあたりはうす暗くなっていた

蓮斗「夢・・・？」

ナオヤ「死んだように眠りやがって、そろそろ出発だ」

連斗「あ、ああ」

さっきの夢は俺の生活していた世界だ

俺はこの世界に来て元の世界の記憶がジヨジヨに薄れてきてしまっているらしい

白亜連斗・・・か

すっかりとつさに名乗った名前、連斗・クル・パーマメントになりきっていたぜ

見知らぬ地で本名を出すのに気が乗らなかったから名乗った名前だ
が・・・

我ながらナイスネーミングだ

だが、これからは毎日日記でも付けるようにするか

昔の記憶を忘れないように

ナオヤ「おい!!」

連斗「わかつてる、今行く」

俺は集会所へ向かった

blizzard to blow to the mind

ナオヤ「びいつくし!!!」

ナオヤの顔面が鼻水にまみれる

アツシ「ふん、この程度の寒さで音をあげるな」

お前はいいよな、温かそうで

ベア「ほら、ホットドリンクは1人1つずつな」

俺はベアから赤いドロドロとした液体が入ったビンを受けとる
いかにもまずそうだ

しかしこの寒さだ、そうは言ってられない

俺は一気に飲み干す

連斗「・・・ごぶっ」

俺は思わずその液体を吐き出した

か・・・辛い・・・

ナオヤ「び・・・げ・・・ばっ」

あまりの辛さにナオヤは足をもつらせそのままエリア1へとつなが
る坂を転がり落ちて行った

ナオヤに続き俺たちもエリア1へと向かう

連斗「ほお・・・」

そこには堂々とそびえたつ壮大な雪山

広大な夜空を覆う美しいオーロラ

澄んだ色の湖という何とも幻想的な光景が広がっていた

アツシ「どうした？」

思わず見とれて足を止めていた俺にアツシが声をかける

連斗「あ、いや、何でもない」

ベア「あーあーナオヤのやつ」

ベアの視線を追うとそこには草食モンスターのガウシ力をいじめ倒
しているナオヤの姿があった

ナオヤ「こいつの素材は中々高く売れそうだぜ」

ナオヤがガウシカを蹴り飛ばす

連斗「おいていくぞ」

ナオヤ「おいおい、少しくらい素材集めたっていいぶっ」

こちらを向いていたナオヤの背後からガウシカが突進をかます

ナオヤ「いつてえな！このクソぶっ」

ナオヤが起き上がろうとするともう1頭のガウシカが突進をかます

そしてナオヤが起き上がろうとすると・・・

ナオヤ「びえ・・・ごめんなしゃい！」

そう言つてナオヤは走り出した

それを追うガウシカ

緑の煙に包まれるナオヤ

どうやらモドリ玉でキャンプに逃げ出しようだ

俺たち3人はナオヤを置いて先にエリア4へと進んだ

連斗「うつ、何て寒さだ」

ベア「この寒さには慣れないね」

アッシ「ホットドリンクの効果が切れる前に肉を焼いておくか」

ベア「そうだね」

そういうと2人は肉焼きセットを取り出し肉を焼きだした

ベア「ふんふんふん」それっ」

ベアが掲げた肉は一見美味そうだが生焼けだった

ベア「くそ、これも慣れないよ」

そういうとアッシをみた

ウルトラ上手に焼けました」

アッシが掲げたその肉は何とも絶妙な焼け具合だった

そのジューシーな見た目に加え滴る肉汁に香ばしい匂い

それだけじゃない、絶妙な焦げ具合に湧きあがる蒸気

それは全てにおいてパーフェクトだった

ゴクリ・・・

俺とベアのヨダレを飲む音が氷でできた洞窟に木霊する

アッシ「肉に関しては街でも俺の右に出るものはいなかった」

アッシはそう言うところがり肉Gを一気に平らげた
アッシ「げえっぶ」

俺はうずきだした食欲を抑えつけながらエリア5を経由しエリア6
へと向かった

連斗「うぐ」

頂上付近の雪の積もったこのエリアは他のエリアとは比べ物になら
ないくらい寒かった

頬を撫でる冷風ももはや心地のいいものではなく痛みさえ感じる
ベア「さて、戦いやすいこのエリアでフルフルを待つか」

アッシ「採集でもして暇を潰すとするか」

そういうとベアは採集を始めアッシはピッケルをとりだし採掘を始
めた

連斗「暇だ」

その時だった

一瞬だが風が強くなりエリアの空気が変わった

・・・来る！

アッシとベアもそれを感じ取ったらしく武器を構える

エリアの中心部に影が現れる

俺はボウガンに麻痺弾を込めると構えた

そして降り立つ

赤いフルフル

連斗「え？」

着地と同時にアッシのレベル3スタンプがフルフル亜種の胴体を直
撃した

コオオオオオオオオ

雄たけびを上げるフルフル

アッシ「ぶひっ」

アッシはたまらず耳を押さえ倒れ込んだ

ベア「危ない！」

ベアの叫びも虚しくフルフルはその身体に青い電気を帯び帯電した

アッシ「ぶでええええええええ」

アッシは吹き飛ばされ崖の一手手前で静止した
しかし地面が雪と足場が悪いため態勢を崩す

ベア「アッシを頼む！」

そういうとベアはフルフルに近づきお得意の立ち回りでフルフルを
翻弄し始めた

連斗「大丈夫か！」

アッシ「落ちる落ちる落ちる落ちる！」

俺はアッシに急いで駆け寄ると手を差し伸べた

連斗「んお！？」

アッシの想定外の重さにあやうくバランスを崩し2人もろとも落下
するところだった

少しは痩せる

アッシ「ぐう・・・直撃だぜ・・・怒り状態だったら危なかった」

アッシはそういうと回復薬を飲み再び武器を構えた

アッシ「亜種とは聞いていなかったが俺の武器は水でアイツの弱点
だ、敵じゃない」

アッシはそういうとイカリハンマーを構えフルフルのもとへ駆けて
行った

連斗「サポートは任せろ！」

俺はそう叫び麻痺弾を発射した
そろそろだ

・・・あと1発で麻痺るな

ベアに向かってダイブするフルフル

それをガードしのけ反るベア

そこにすかさず攻撃を仕掛けるアッシ

さすがだ、ナイスコンビネーション

するとフルフルは再び身体に電気を帯び始めた

連斗「ここだ！」

俺は狙いを定め麻痺弾を発射する

ナオヤ「いやーハチミツ採集してグレート作ってたら遅れびっ!？」
突如現れたナオヤに麻痺弾がクリティカルヒットする

ナオヤ「ばにつ!?!?じびれるっ」

麻痺状態になったナオヤのもとに帯電しながらダイブをかますフルフル

そして現れるアイルー

運ばれてゆくナオヤ

・・・俺、悪くないよな

俺が再び麻痺弾を発射すると今度こそフルフルにヒットした
連斗「今だ!」

麻痺状態になったフルフルにアッシとベアが総攻撃を加える
水冷弾を打ちたいところだが亜種とは聞いていなかったので持っていない

ここはやはりお得意の貫通弾の出番だぜ

ゴオオオオオオオオオオオオ

連斗「うおっ」

意気揚々とボウガンを構えた俺の耳をつんざくような悲鳴がエリア6に鳴り響く

怒り状態か!

フルフルの口に青白い電気が見える

今度はブレスか・・・!

あいにくフルフルは俺の正面にいた

しかし奴のブレスは3方向に分かれるため少し横にずれば当たらんのだ

俺はフルフルのブレスの軌道を避けると再びボウガンを構えた

ベア「どりゃ!」

ベアがフルフルの背後から斬りかかる

そしてブレスが発射されるが俺の横をかすめていく

しかしフルフルの腹に潰されたベアはフルフルの眼前へ吹き飛ばされた

ベア「いつてえ」

起き上がるベアの背後からは再びフルフルが首を持ち上げる姿が見えた

アッシ「ベア！」

アッシが叫んだがベアの反応よりもブレスの速度のほうが速かったベア「ぶびれえ」

転がりながら吹き飛ぶベア

まずい……！

後一撃喰らったらキャンプ行きだ！

俺は角笛を取り出そうとするが寒さで上手く指が動かない

連斗「くそっ……！」

するとナオヤが死んだあたりに何かが落ちているのが目に入った連斗「アッシ……！」

俺はそれの近くにいたアッシの名を叫びそれを指さした

アッシはそれが何かを悟るとフルフルへ向かって思いきり投げ飛ばした

アッシ「びいひいひいふっ」

それは再びベアに向かってブレスを吐こうと首をもたげたフルフルの脳天へ直撃した

茶色い煙が辺りを包みこむ

フルフルは視覚が衰えている代わりに聴覚と嗅覚が発達しているんだこのこやし玉は効くだろう！

案の定フルフルはよろよろとした足取りでふらつくと翼を広げエリア6を急いで後にした

するとどこからともなく

ナオヤ「俺、再び参じょ……くっせえ……！！」

アッシ「大丈夫か？」

ベア「なんとか……」

ナオヤ「どうした？ランゴスタに刺されて麻痺ったか？ん？そーい

やここは雪山だからランゴスタはいないはず、あれでもさつき・・・

「

連斗「とにかく、ベアは無事だったことだし、さっさと奴を追うぞ」
俺はそういうとエリア7へと向かった

そこには数頭のブランゴとフルフルがいた

アッシ「ベアは俺のアシストを頼む、連斗は俺たちの援護射撃、ナオヤはブランゴを」

ナオヤ「なんでだよ！」

ベア「フルフル亜種の弱点は水だからナオヤには火が弱点のブランゴを頼んだのさ」

ナオヤ「なーる！」

そういうとナオヤはブランゴの元へ駆けて行った

こいつら・・・完全にナオヤの扱い方を心得ていやがる

俺はフルフルからある程度距離をとると弾をチョイスした

散弾や拡散もいいが複数プレイのときは仲間の邪魔になりがちだし
しかし部位破壊といったらやはり散弾だろう

手数は減るがベアとアッシの隙をついてフルフルに攻撃するとするか
ベアの毒属性武器がダメージを余分に与えている分アリだろう

ベア「こつちだっ」

ベアがフルフルを引きつける

アッシ「罠OKだ！」

アッシがシビレ罠をしかけると俺たちはフルフルをそこへ誘導した
ギョエツ

かかった！

アッシとベアが一斉攻撃をしかける

ここで散弾を撃つわけにもいかない俺はフルフルに駆け寄った
連斗「ばああああっ」

ボウガンで殴りつける

ダメージは極微量だが何もしないで見ているよりはマシだ
連斗「まっ！」

殴りまくる

そろそろ罠が壊れるころだ！

アッシ「帯電するぞ！離れる！」

アッシの合図で俺とベアはフルフルから離れた罠が壊れる

しかしフルフルは身動き1つとらない

ん……？

……これは……瀕死だ！

連斗「よっし！一気に叩け！」

再び総攻撃を開始しようと駆け寄った瞬間にフルフルは飛び立ってしまった

だが巢は分かっている

エリア3だ

ナオヤ「ブランゴの奴……俺の相手ではなびっ」

後ろからのナオヤの声が途切れた

その代わりに何やら荒い息遣いが聞こえてくる

連斗「ん？」

振り返るとそこには今にも俺たちに突進しようと身構えるドスファ

ンゴの姿があった

ベア「いたのかい」

アッシ「ナオヤ……お、俺たちは一端引く……この強敵はお前に任せた……ぐっ」

ここで新事実が発覚だ

アッシはなかなかの演技派

ナオヤ「おうよ……！」

俺たちはナオヤをエリア7に置いておくとエリア3へとダッシュしたアッシ「レベル3で一気にケリをつける、お前らは手を出すな」

そういうとアッシは1人でエリア3へと入って行った

ベア「じゃあボクらは採集でもしてますか」

連斗「おいおい、大丈夫なのか？」

ベア「あいつ結構無茶するところあるけど相手は瀕死だし」

まあ確かに瀕死なら飛竜でも1人でいけるか

ベア「そうは言っても」

連斗「エリア5はなにもねーな」

俺たちは笑いながらエリア3へ向かった

アッシ「おう、帰るぞ」

エリア3に入ると息の根を止められたフルフルと何やらドデカイ球体を持っているアッシの姿があった

ベア「それ好きだな」

アッシ「ああ、極上の味だぜ」

どうやらアッシが抱えているのは飛竜の卵のようだ

体系を裏切らないキャラをしてやがる

ベア「さて、ボクらもさっさと剥ぎ取って帰ろうか」

帰りの気球でクエスト情報を見ると報酬が3分の1に減っていた

a n d a n e w w i n d b l o w s

ケン「おつかれさん」

ナオヤ「おう」

連斗「おいおい、亜種だなんて聞いてねーぞ」

ケン「ん？何のこと？」

アッシ「クエストを間違えるなんて受付が一番しちやいけないことだろう」

ベア「お陰で散々だったよ」

ケン「いや、クエストを選んだのはナオヤだよ」

俺たちが振り返ると急いで集会所を出ていくナオヤの姿があった
それと入れ替わりに駆け込んでくる村長

オカ「だったいべんじゃ！！！」

アッシ「トイレ行けよ」

ベア「下品な奴だな」

連斗「次は何のクエに・・・」

オカ「ちがあああああああう！！！」

俺たちはオカ村長の怒鳴り声に驚いて一瞬硬直する

ケン「村長落ち着いて、どうしたんですか？」

オカ「ハア・・・ハア・・・」

一体何なんだ

オカ「大変じゃ！！！」

わかったよ

オカ「ち・・・超巨大モンスターシェンガオレンが街へ向かってい
るんじゃ！」

連斗「へえ、どのくらいデカイんだろ」

アッシ「砦蟹と言われることもあるくらいだから相当な大きさなん
だろうな」

ベア「モスラとどっちが大・・・」

ベア「効かないよ」

ナオヤ「じゃあ、こやし・・・」

ベア「効かないよ」

ナオヤ「そんな馬鹿な・・・奴は神か？」

ナオヤが膝から崩れ落ち震え始める

連斗「怖いのか？」

ナオヤ「武者ぶるいだよ・・・！」

そして夜は更けていった

i t ' s n o t a f o r t b u t I t h a t p r o t e c t y

もうなんか本編よりサブタイトル考えるほうが楽s

それでは第12話「君を護るのは砦ではなく僕だ」をご覧ください

i t ' s n o t a f o r t b u t I t h a t p r o t e c t

連斗「うおっ」

俺は思わずよろめいた

今俺がいるのは砦

街へ侵入しようとする大型モンスターを防ぐために建てられた建物だ
後ろに見えるのは超大型モンスターシエンガオレン

こいつが歩くたびに地面が揺れて気を抜くとこけてしまいそうだ
まるで数秒ごとに地震が起きているかのような感じと言えば伝わる
だろうか

それにしてもここは辺りを見回しても岩山だらけで何も無い
まったく殺風景でつまらない土地だ

少しは密林や森丘を見習ってほし・・・

ナオヤ「早くしろ！応急薬全部貰うぞ！」

連斗「今行く」

俺はそういうとエリア1を後にしキャンプへと入った

キャンプにすればさすがに揺れは来ないようだ

連斗「あれ？俺の携帯食料は？」

ナオヤ「知るか」

連斗「ベア？」

ベア「ボクのはほら」

連斗「アッシ・・・」

アッシ「遅いのが悪い、それにお前はガンナーなんだからいらんだ
ろ」

このデブ

俺は残った支給品を取るとエリア1へと向かった

シエンはまだエリア2に到着していないようで地響きだけが響いて
いる

アッシ「取りあえず爆弾を設置して奴が来たら爆破、それから総攻撃だ」

ベア「はいよ」

そういうと俺たちはシェンが通るであろう一本道のド真ん中に爆弾を次々と設置した

それから俺たちはナオヤをみる

ナオヤ「安心しろ、自爆するとも思ってたか？」

俺たち3人は同時に頷いた

ナオヤ「・・・・・・・・」

その時だった

遠くから何かが飛んでくる

あ・・・あれは！

ブレスだ！

俺はナオヤを思い切り突き飛ばすと地面に伏せた

ナオヤ「のがっ」

連斗「ぐっ」

BLAMMMMMMMMM

背後で爆発音がする

ベア「爆弾が！」

アッシ「くそ！来るぞ！」

誰かアメコミみたいな擬音につっこめよ

ブレスが飛んできた方向をみるとシェンガオレンが霧の中から姿を現した

間近でみるとそのあまりの大きさ、そして迫力に思わずひるんてしまいそうになる

俺の隣でもぞもぞとナオヤが立ち上がる

ナオヤ「ぐ・・・いきなりブレスとはやってくれんじゃねえか」

ナオヤとアッシが溜め攻撃の準備をする

俺は大量に持ってきた弾に邪魔されながらも目標から距離をとるとスコープを覗いた

俺だって武器を強化したんだぜ

金だけで楽に強化できるのがボウガンのいいところだ

ちなみに俺はロングバレルよりもサイレンサー派だ

ナオヤ「よつつつ!!」

アッシ「びいいいいいっふっ!!」

エリア2に突入したシエンガオレンに2人の溜め3が炸裂！
するはずだったがそうはいかなかった

2人の近くにシエンの足が着かれその振動で2人は態勢を崩したのだ
そこに再びシエンの足が降ってくる

ナオヤ「んぎ」

アッシ「あぶらっ」

吹き飛ばす2人

ベア「だっ大丈夫か!？」

足踏みとはいえ超大型モンスターゆえダメージは相当なものだ

ナオヤ「んびっんびっんびっ」

ナオヤは勢いよく起きあがると応急薬を飲みまくっていた
アッシ「くそ・・・俺を揺らすとは・・・やるじゃねえか」

ベア「タイミング良く攻撃するんだ!」

ベアはヒットアンドアウェイを繰り返しうまい具合に足踏みを避け
ながら攻撃をしている

さすがといったところか

俺は拡散弾を取り出した

ふっ・・・

俺につままれた拡散弾が日差しの輝きを反射し煌めく

ついにこいつが使える時が来たか

その名の通り敵に当たると弾が拡散するためにパーティプレイには
向いていない弾だ

しかし全弾の中でも威力はトップクラス

大型モンスターのクエストには重宝する弾だぜ

俺はリロードをするとスコープを覗き慎重に狙いを定め

撃ち込んだ

連斗「ファツキン！」

シエンが被っている大型モンスターの頭蓋骨に弾が突き刺さる
そして拡散

連斗「っしゃ！」

ガツポーズ

この調子なら今回も楽勝だな

そんなことを考えていた時だった

神はそう上手く事を運んでくれないものだ

ナオヤ「へっへ！いくぜよ！」

頭上から声が響く

見るとエリア頭上を横断している石橋にナオヤが乗っているではないか

アツシ「何やってんだ！」

ごもつともな質問です

ナオヤ「何って剥ぎ取るのよ！こいつの素材は高いぜえ！」

ナオヤはそういうと両手を広げダイブした

連斗「あっ」

ナオヤ「もげっ」

地面に叩きつけられるナオヤ

そこにシエンのハサミが飛んてくる

ベア「うおっ」

ナオヤとそれを助けに入ったベアが共に吹き飛ばされる

現れるアイルー

運ばれるナオヤ

ベア「んぐ・・・忍耐の種を食べていなかったら死んでいたよ・・・」

「

ベアはそういうとキャンプへ退散した

アツシ「そろそろエリア移動だ、いくぞ！」

連斗「俺は背後からもう少し攻撃しとく、先に行ってくれ」

アッシ「頼んだ」

そういうと俺は拡散弾を撃ちまくった

よく見ると殻が少し壊れている気がする

そして俺は俺の攻撃に気づいていないかのように歩き続けるシェン
を尻目にエリア2を後にした

ここがエリア3か

エリア2と全く見た目に違いが見つからん

ナオヤ「不覚だったぜ・・・この対巨龍爆弾でアイツの甲殻を吹き
飛ばしてやろうとしたんだが・・・」

うそこけ

シェンを見ると足が数本赤くなっていた

ベア「部位破壊までもう少しだ！連斗は殻を頼む！」

連斗「おう」

俺はそういうと貫通弾を装填した

やっぱ巨大モンスターには貫通弾だぜ

連斗「ばあああああ！！」

俺が撃ち出す弾が次々とシェンを貫通していく

連斗「まっ！まっ！まっ！」

今日の調子はベリーグッドだ！

アッシとナオヤも攻撃のタイミングを掴んできたらしく上手く足を
避けている

俺も弾をリロードすると殻に撃ちまくった

奴の弱点は殻の中だからこの貫通弾は効いているはずだ

足元ではひたすら斬りつける剣士が3人

ここには弱点を攻撃するガンナー

その中心にはただただ歩き続ける巨大な蟹

その光景を前に俺の頭にふと疑問がよぎった

俺たちの使っている武器じゃシェンにダメージを与えられていない
んじゃないか？

その証拠にこいつはびくともしないで歩き続けている
俺たちじゃ・・・

いやダメだ！

信じるんだ！

自分を！

アッシとベアを！

連斗「ばあああああまっ！！」

俺はシェンに向かって渾身の一撃を放った
ギギイ

爆発するように弾け飛ぶ巨大モンスターの頭蓋骨

崩れ落ちるシェン

アッシ「ダウンするぞ！避ける！」

ベア「おう！」

ナオヤ「ぶげっ」

このダウンは俺たちにとって転機だった

攻撃にまったく動じず歩き続けるシェンに不安を覚え始めていた俺
たちのやる気が再び蘇った

ナオヤ「一気に叩くぞ！このチャンスを見逃すな！」

俺たちはひたすら攻撃を加えた

しかしシェンは何事もなかったかのように立ち上がるとそのままエ
リア3を後にした

ナオヤ「いいぞこの調子だ！奴は俺たちNSJの敵じゃない！」

1人わめくナオヤを残し俺たちはキャンプへと戻った

ベア「これは？」

ベアがドデカイボウガンの弾のようなものを拾い上げる

連斗「バリスタの弾さ、エリア5の高台で使った」

アッシ「これもか？」

アッシがデカくて黒い球体を持ち上げる

連斗「それもエリア5の高台にある大砲で使った、卵じゃねーぞ」

俺の冗談にベアは笑ったがアッシは鼻を鳴らすと大砲の弾を投げ出しエリア4へと向かった

俺もそれに続く

背後では小さな爆発音とナオヤの悲鳴が聞こえた

what do pure white wing think? (前書き)

純白の翼は何を想うのか

what do pure white wing think?

アッシ「ここが正念場だ、気を抜くな」

アッシはそういうとイカリハンマーを構え駆け出した

ナオヤ「何かアイツがリーダーみたいなノリになってないか？大丈夫か？」

ベア「大丈夫だよ」

ベアもアッシの後に続く

ナオヤがこちらを向いたので何か言われる前に俺も駆け出しポジシヨンについた

ベア「そろそろだ！気をつけて！」

ベアはそういうとシエンから距離を取った

シエンの足を見るとそのすべてが赤く変色していた

ナオヤが足を切り上げ

アッシがスタンプをかます

そして俺が拡散弾を撃ち込む

ンギギイイ

シエンが立ち上がった

が次の瞬間足が元の青い色に戻りその巨体が降ってきた

アッシ「ぶひっ」

近くにいたアッシが衝撃で吹き飛ぶ

距離を取っていたベアはすかさず近寄ると攻撃をしかける

ナオヤは・・・？

俺は辺りを見回す

よかった、担架の上で元気そうだ

俺は遠のくナオヤから視線を外すと再びシエンに弾を撃ち込んだ

連斗「ファッキン！」

アッシ「チキン！」

ベア「ロツキン！」

この3人の総攻撃は相当効いたはずだ

しかしシェンは再び立ち上がり再び何もなかったかのように歩き出す
俺たちは言い知れぬ不安に包まれながらもその背中を見送った

キャンプへ戻るとナオヤがベッドに座りうつむいていた

連斗「大丈夫か？」

ナオヤ「・・・・・・・・」

何も答えない

レウスときも落ち込んでいたが今回はその比ではないようだ
いつも調子をこいて虚勢を張っているが、それは自分の弱さを隠す
ためなのかもしれない

本当は人一倍責任感が強く、弱い自分に我慢ができないんだ
虚勢を張っているのはその弱さを人に悟られたくないからじゃない
自分で認めたくないからなんだ

初の超大型モンスターにして責任重大のこのクエストでの2死でつ
いに限界がきたのだろう

連斗「ナオヤ・・・」

俺はナオヤの肩に手を添える

ナオヤ「ぶあつくしいっ!!」

俺の顔面に飛び散る鼻水

ナオヤ「いやあ、クシャミが出そうで出ないって嫌な感じ」

そう言つて笑うナオヤにボディブローをかますと俺はエリア5へと
向かう入口をくぐった

エリア5へ入ると大砲の弾を抱えたアッシとバリスタを撃ち込むべ
アの姿があった

アッシ「ぽおおおおくっ!!」

アッシが弾を大砲に詰め込み点火する

BOMB!

発射の衝撃に思わずアッシが尻もちをつく

弾は弧を描きながらエリアに突入したシェンの脳天へ直撃した
一瞬たじろぐシェン

アッシ「いくぜ！お前ら俺にバリスタ当てんなよ！」

ナオヤはそう言うと言った高台から飛び降りシェンへ向かってダッシュした
俺はもう1台のバリスタに弾を込めると照準を定めた

ベア「ボウガンって難しいな、よくこんなのが使えるよ」

連斗「慣れさ」

それから俺たちは数十発のバリスタをシェンに打ち込んだ

途中シェンがダウンし遠くからアッシの歓声が聞こえてきた

ベア「これで！」

連斗「ラストオ！」

BANG！BANG！

ベアと俺の最後の弾がシェンに当たり弾ける

ベア「いくか！」

連斗「おう！」

ナオヤ「ちくしょう！イーオスに邪魔されて大砲の弾運べねえ！」

防具の所々が焦げ付いたナオヤが合流し俺たち3人はアッシの元へ
ダッシュした

アッシ「できれば皆に到着する前に倒したい！」

ナオヤ「まかせろ！」

シェンはそろそろ俺たちの存在を気にし始めたのか頻繁にハサミを
振るようになってきた

しかし今更そんなものに当たるはずもなく俺たちは華麗に回避する

そしてスキを見て射撃、斬撃

弾ける弾に切り裂かれる甲殻

この完璧なリズムのハーモニーを崩さなければ勝てる！

そう思った時だった

俺たちの中に不協和音がいた

アッシ「くるぞ！」

再びシェンのハサミが振り子のように振られる

ナオヤ「んぎ」

なぜかシエンの真下で大剣を研いでいたナオヤに直撃する
吹き飛ばされ痙攣するナオヤ

連斗「ナオヤ！」

ナオヤ「びえ・・・」

再びシエンのハサミが振りあげられる

連斗「ナオヤ！！」

俺の叫びが届いたのか我に返ったナオヤは間一髪のところ緑の煙
に包まれ姿を消した

そしてシエンは砦に到着した

ベア「マズイよ、もう砥石の数が残り少ない」

アッシ「俺のスタミナも長くは持たないだろう」

連斗「持久戦に持ち込まれたら負け・・・か」

そうだ、こいつだ

俺は頭上にあるドデカイ槍を見上げた

連斗「俺はこの撃龍槍を使う！」

ベア「任せた！」

俺はそういうと高台についているハシゴを上り始めた
するとシエンが立ち上がり動きを止めた

今だ！チャンス！

俺は急いでハシゴを上ると位置を確認した

シエンを見るとボロボロの大型モンスターの頭蓋骨が口を開いてこ
ちらを向いている

・・・ヤバイ！

とっさに地面に伏せる

そして発射されるプレス

かなりの衝撃だ

外壁が崩れ落ち砦がきしむ音が聞こえる

もう1度こんなものを撃ち込まれたら・・・

俺は急いで撃龍槍のスイッチの前へ向かうと全力で叩いた

カンッ

乾いた音が崩れかけた外壁に反響する

ギュルルルルルルル

そして次の瞬間数本のドデカイ槍がシェンを貫いた

ギエエエ

ダウンするシェン

連斗「今だ！」

俺が叫ぶまでもなく下の2人はシェンを斬りつけていた

キュルル

ゆつくりと元の位置へと収まる槍

この槍は威力はかなりのものだが連射することはできない

もう1度使うにはしばらく時間が経たなければならないからだ

再び高台の上に登るには労力が必要なため基本クエストで活躍する

のは1回きりというのが普通だろう

俺はボウガンに散弾をリロードするとダイブした

持久戦に持ち込まれて困るのは何もアッシとベアだけじゃない

俺もだ

もう残りの弾丸はこの散弾のみだ

アッシ「立ち上がるぞ！」

シェンは立ち上がるとハサミを振りあげた

そして狂ったように何度もそれを砦に叩きつける

ベア「止めるんだ！」

俺たちは必死に攻撃をしかけた

しかしシェンはそんなことはまったく気にしないようにひたすら砦

を攻撃し続ける

辺りは日が沈みかけていた

夕日と共にこの砦も沈んでしまうのか？

俺は脳裏に浮かんだ崩れ落ちる砦の映像を振り払うとひたすら散弾

を連射した

この速度では連射と言えるかどうか疑問だが

この持久戦で疲れ切った身体が思うように動かず気を抜いたら弾を打ち出す時のわずかな衝撃ですら尻もちをついてしまいそうだそれはアッシとベアも同じようだった

アッシ「んご・・・！」

スタミナが切れたのかハンマーを振り上げるが高さが足りていない足も震えていて今にもダウンしそうだ

ベア「せいせい！」

ベアは一見何ともなさそうだが攻撃が何度も弾かれている恐らく砥石の数が残り少ないため調節しているのだろう

そして俺も・・・

連斗「くるああ！」

最後の弾をシエンに撃ち込んだ

はあ・・・はあ・・・はあ・・・はあ・・・

この空間には俺たち3人の疲れ切った息遣いとシエンの攻撃によりきしむ砦の音だけが響き渡る

そしてシエンは再び背中の中頭蓋骨を砦へ向けた

頭蓋骨の開かれた口にはうつすらと蒸気が見える

まずい・・・！

あと1撃でも撃たれたら・・・！

とつさに俺はポーチをみた

空だ

完全に弾が尽きた

アッシをみる

アッシ「ぐ・・・スタミナが・・・」

アッシはそうとうと片膝をついた

ハンマー使いにとってのスタミナ切れは死を意味する

ベアをみる

ベア「切れ味が・・・くそ・・・」

ベアも手数が多い片手剣という武器のため砥石が尽きたようだ初めての持久戦に俺たちは完全にしてやられていた

ふと俺は身体中から力が抜け膝から崩れ落ちる

もう・・・ダメだ・・・

俺たちは・・・ここまでのようだ・・・

そして俺は地面に倒れ込んだ

シエンがブレスの衝撃に耐えようと足に力を入れたため甲殻種特有のきしむような耳障りな音が辺りに響く

俺はゆっくりと目を閉じた

これが・・・敗北というものか

俺は悟った

・・・

その時だった

頭上から声が響く

ナオヤ「またせたな!!」

目を開き声のした方向を見る

逆光でよく見えない

あれは・・・ナオヤ?

するとその人影は指を1本立てるとそれを天に向けて言い放った

ナオヤ「天を切り裂く孤光から舞い降りし純白のペガサス!俺の名は・・・ナオヤ・スネ・ジャングル―ネ!」

カンッ

ナオヤはそういうと撃龍槍をシエンにぶちかました

数本のドデカイ槍が勢いよく突き出しシエンの甲殻を貫き破り破壊する

ギユルルルルルルルル

ギギギエエエエエエエエ

バキバキバキバキ・・・

シエンを貫く激龍槍とシエンの崩れ落ちる音だけが崩壊寸前の砦の壁に反響した

シエンが崩れ落ちる衝撃は凄まじく、砦が壊れるのかと心配してしまっただった

夕日と共に沈んだのは皆ではなくシェンだった
そしてしばしの沈黙が訪れた

.....

連斗「倒した・・・のか・・・？」

アツシ「やった・・・やったんだ・・・！」

ベア「守りきったんだ・・・僕らが・・・！」

相当疲れているのか2人は仰向けになり動かない
俺はよろよると立ち上がった

連斗「うつ・・・」

しかし身体の節々が痛み立ち上がるのもままならない
連斗「ん？」

そのとき俺に手が差し伸べられた

ナオヤ「立てよ、帰るぞ」

俺はナオヤの手を取り

立ち上がった

連斗「・・・おう」

personas whom blood is the same (前書)

血を分かつ者

村へ戻るとオッサンが抱きついてきた

オカ「よおおおおくやってくれたああああ」

うわっ

連斗「はは、大変でしたよ、えっとほら、この、はっ・・・離れろ！」

突き飛ばされたオッサンはアイテムボックスの角に頭をぶつけてうずくまった

ん？

受付のほうを見ると見知らぬ長身の男がケンと話をしていた

アッシ「あいつは・・・！」

ベア「何故こんな所に！？」

連斗「ん？知り合いか？」

俺の質問に2人が答える前にその男はこちらに気づき近寄ってきた男「本件のことについては感謝しています、本来なら私が承るべきクエストだったのですが」

全身ギルドナイトスーツ一式に身を包み武器はホーリーセーバーという何ともキメキメなスタイルだ

連斗「かまわんよ、街はもう大丈夫なのか？」

男「ええ、私が襲撃してきた古龍を討伐しましたので」
ほう

ナオヤ「見るよシェンの素材！どんだけ高価なんだよ！硬化なだけに高価っ・・・」

テンションの高いナオヤの声がいきなり途絶えた

振り向くとナオヤは男の顔を見て目と口を見開いていた

ナオヤ「た・・・タカマサ・・・」

男「久しぶりだね、兄さん」

え？え？え？

男「申し遅れました、私はタカマサ・マユ・ジャングルーネ、そこにいるナオヤ・スネ・ジャングルーネの弟です」

俺は思わず絶句する

この男のことは知ってたであろうアッシとベアも2人の関係には驚いているようだった

アッシ「ギルド直属の精鋭ハンター部隊隊長がナオヤと兄弟だと・・」

ベア「ナオヤとギルド・ディープヘアーズの凄腕ハンターが・・」

タカマサ「あなたたちの噂は聞いています、なんでもギルドを裏切ったとか？」

タカマサはそういうと笑みを浮かべた

アッシ「なっなんだと!？」

アッシがタカマサに掴みかかる

ベア「ま、まあまあ、事実だし」

そういうベアの顔も引きつっている

ナオヤ「帰れ・・帰れよ!」

ナオヤがタカマサを見据える

タカマサ「まあまあ、今日は兄さんにとっていい話を持ってきたんだ」

ナオヤ「聞くつもりはない」

ナオヤはそういうと集会所の出入り口へ向かった

タカマサ「私の部隊に入らないかい? いつまでもこんな小さな村にいるつもりはないでしょう?」

ナオヤの歩みが止まる

なんだって?

それはつまり弟の部下になれということか?

よくも実の兄にそんなことをぬけぬけと!

タカマサ「気が向いたらいつでも街に来てください、それでは私はこれで」

タカマサはそういうとマスク村を後にした

アツシ「くそつ気に入らん奴だ」

ベア「しょうがないよ、実際実力あるんだし」

それにしても衝撃の事実だったな

このナオヤに弟がいたとは

ナオヤを見ると放心状態のようだった

連斗「おいおい、ナオヤ？」

俺がつつくとナオヤは棒きれのように倒れアイテムボックスの角に頭をぶつけ気絶した

initials

「おほ・・・」

俺はその華やかさに開いた口が塞がらなかった

俺の名前は白亜連斗こと連斗・クル・パーマネント

街にいる

何故俺が街にいるのかって？

まあ長くなるが説明してやろう

どうやらナオヤが病気になったようだからわざわざ街に薬を買いに来たんだ

弟との再会が相当ショックだったみたいだ

アッシとベアは街には行きたくないというから俺1人で来たってわけ
もちろん俺はアイツの薬の為だけに来るようなお人よしじゃない

観光！

その目的が俺の脚を動かした

「すいません、アイテム屋ってどこに・・・」

道行く人に尋ね尋ね何とか辿りついた

「ここか・・・デカイな」

俺はマスク村の十倍はあるであろう街のアイテム屋を見回した

こんなところで薬を探していたら日が暮れちまう

連斗「すいません」

店主らしい男に声をかける

店主「おー何アルか？」

連斗「えーと薬を探しているんですが・・・」

症状を伝えるとその薬はすぐに見つかった

シン・ヘア・シンドローム

それが奴の病名らしい

俺の世界で言う鬱病のようなものだ

店主「また来てアル！」

俺は薬をポーチにしまいこむと深呼吸をした

連斗「さて！」

観光だ！

俺も一応はハンターだし街の集会所とやらをみておくか

その後に歌姫のミュージカルと闘技場だ

俺は着くやいやな勢いよく集会所の扉を開けた

連斗「おお・・・」

集会所はかなり大きくそれに見合った数の人がごった返していた
酒を飲み暴れるハンターもいればクエストの準備をしているハンター、
ただ会話を楽しんでいるハンターなど様々だ

俺は近くにあつた空席に腰かけるとミルクセーキを注文した
それからしばらく近くのハンターたちの会話を盗み聞きした
隠しエリアやら黄金の竜だとか無人の城、モンスターの言葉が分かる
ハンターだとか話題は尽きない

男「おい！兄ちゃん！」
ん？

後ろで誰かが絡まれているらしい
かわらないほうがよさそうだ

立ち上がり歩き出した俺の肩が掴まれる
痛い

連斗「はい？」

振り向くとそこには濃い顔の小柄なハンターがいた

男「俺が呼んでんだよ、まさかシカトかあ？」

かなり酔っているようだ

相当酒臭い

連斗「臭い息を吹きかけるな」

男「はっはっは！面白いガキだ！」

連斗「どうも」

再び歩き出そうとした俺の肩が再び掴まれる

男「ふざけてんじゃねえ！この俺を誰だと思ってやがる！」

連斗「知らん」

男「なら教えてやる！俺の名はS・マルコスだ！」

周りの取り巻きが野次を飛ばす

連斗「Sは何の略だ？スネ毛か？」

マルコス「ふざけてんじゃねえ！いい度胸だ！」

取り巻きたちが俺を取り囲む

集会所の人たちはまったく気に留めていないようだ

こんな騒ぎは日常茶飯事なのだろう

連斗「はあ」

俺はため息をつくと取り巻き1の顔面に裏拳を叩きつけると足を払いダウンさせた

そして取り巻き2のパンチを避けるとボディブローをかます

次に後ろからイスで殴ろうとする取り巻き3にワンツ―からのアッ

パーで顎を砕く

キマったぜ

連斗「だてにクエストで鍛えられてねーよ」

振り向いた俺の顔面にマルコスのパンチが炸裂した

連斗「んげ」

吹き飛んだ俺はイスに顔面から突っ込んだ

鼻血が噴き出す

マルコス「なかなかやるじゃねえか！気に入ったぜ！」

連斗「ほりゃるうも」

痛みでセリフが上手く言えにやい

連斗「そりゃどうも」

クールに言いなおすと俺は立ち上がった

マルコス「まあ座れや！」

促されるままに俺はマルコスの正面へと座った

マルコス「げっへっへ！これだ！」

マルコスが取りだしたのは紙とサイコロだった

連斗「こいつをどうしようってんだ？」

マルコス「俺と勝負だ！」

ギャンブルか

そんなことをして俺に何の得があるってんだ
これだから酔っ払いは嫌いなんだ

連斗「断る」

俺はそういつて立ち上がった

マルコス「げっへっへ、こいつが欲しくないのか？」

マルコスはそう言うのとポケットから何かを取り出した

・・・薬！

俺は慌ててポーチをまさぐる

・・・ない

俺はイスに座りなおす

マルコス「話がわかるじゃねえか」

観光に来たはずなのに何故こんなことに

マルコス「お前が買ったならこの薬を返してやろう、だが負けたら・・・

」

負けたら・・・？

マルコス「お前の装備を貰う」

連斗「何だって!？」

俺は思わず立ち上がる

マルコス「ギルドを追い出されておまけに装備を没収されちまっ
てな」

しょうがないがナオヤには苦しんでもらうか

そんな考えが頭をよぎる

それもいいがこいつの悔しがる顔を見たい

その気持ちのほうに勝った

連斗「上等だ」

ギャンブルは好かないがやってやるぜ

俺はサイコロをひったくるといかさまがないか調べた
マルコス「お先にどうぞ、ぐへへ」

連斗「ふん」

俺はサイコロを振る

・・・3

紙の上に置かれた俺の駒を3つ先のマスへと進める

マルコス「次は俺だあ！」

マルコスは勢いよくサイコロを振った

・・・5

マルコス「やったぜ！・・・げえ！」

5つ先のマスには文字が書かれていた

連斗「1回休みか、ふん」

勝負はかなり長引いた

が結局俺の圧勝だった

顔をひきつらせ薬を差し出すマルコス

一体こいつは何がしたかったんだ

連斗「恨むならお前の運の悪さとギルドを恨むんだな」

マルコス「くそお・・・タカマサあ・・・」

ん？今何て？

連斗「デ IPP・ヘアーズ・・・」

俺がその名を口にするとマルコスは顔色を変えて怒鳴った

マルコス「その名を口にするんじゃないやねえ！」

そして隣にあった酒瓶を掴むとラツパ飲みを始めた

やれやれ

俺も街には二度と来たくなくなりそうだぜ

俺は受付へ行くとドリンク代をマルコスにつけてから集会所、それ

から街を後にした

r o a d w h e r e e a c h w a l k (前書き)

それぞれの歩む道

road where each walk

連斗「ほら、飲め」

俺はナオヤに薬を差し出す

しかしナオヤは布団をかぶり言うことを効かない
ったく

俺がどれだけ苦勞してこの薬を持ち帰ったと思ってんだ
いつまでもこいつの世話をしているわけにはいかない

俺はアッシにナオヤを任せるとベアとクエストに出かけることにした
本当は村長あたりに頼みたいんだが仕方がない

村長は病気ではないが寝込んでいるからな

頭に怪我をして

俺は装備を整えると集会所へ向かった

そこにはベアがいた

俺をみたベアは待っていましたと言わんばかりに立ち上がる

ベア「付き合って貰って悪いね」

連斗「いいんだ、行こうか」

ケン「おーい！忘れもんだよ！」

ケンが急いで走ってくる

連斗「おう、悪いな」

ベア「シビレ罠か、捕獲するのか？」

連斗「そのほうがいいだろ？」

ベア「悪いね」

俺とベアはアイテムを確認するとバサルモス狩猟のために火山へと
向かった

アッシ「ナオヤ、そんなんじゃないつまでたっても・・・」

ナオヤ「ん？」

ナオヤはこそこそと辺りを見回した

ナオヤ「連斗は？」

アッシ「クエストに出かけたが」

ナオヤ「そうかそうか」

安心したナオヤは起き上がると薬を飲み始めた

アッシ「なんだ、元気なのかよ」

ナオヤ「まあな、アイツの留守中に勝手に素材使っちゃったから怒られそうで」

アッシ「……………」

ナオヤ「それよりよ、俺たちはどうするんだ？」

アッシ「というと？」

ナオヤ「クエストだよ、暇なら付き合ってくれよ」

アッシ「何のだ？」

ナオヤ「ダイミヨウザザミなんてどうだ？」

アッシ「また蟹かよ……………」

ナオヤ「防具作りたいんだよ、いいだろ？ なっ？ なっ？ なっ？」
しつこい野郎だ

アッシ「しょうがねえ分かったよ」

ナオヤ「ひょっほう！ じゃ集会所で待ってるぜ！」

そう言つとナオヤはベッドから飛び出し集会所へと駆け出した
アッシ「元気すぎるんだろ……………」

俺はそう呟くと集会所へと向かった

c r a b r o c k · n r o l l (前書き)

カニロック

c r a b r o c k n r o l l

連斗「あつ・・・」

額からしたたる汗をぬぐう

俺は今火山のキャンプにいる

それなりの暑さには覚悟していたがまさかここまでとは・・・

あまりの蒸し暑さに思わず防具を脱いじまいそうだ

ベア「おーい、早くしないとペイントボール貰うぞ!」

連斗「やるよ」

俺はそういうと支給品ボックスの中からクーラードリンクを取り出した

ベア「これがボクたちの生命線だからね、切らせないようにしなきゃ」

2人一緒に一気にそれを飲み干す

連斗「カーツ!」

渴いたノドを冷たい液体が洪水のように流れていく

ベア「ホットドリンクよりも全然うまいね」

連斗「まったくだ」

さて今回はバサルモスだったな

連斗「んじゃ、エリア7へいきますか」

ベア「りょーかい」

俺たちはエリア7へと向かった

ナオヤ「やべ!」

アッシ「なんだ?」

ナオヤ「クーラードリンク忘れた!」

こいつは何しに来たんだ

アッシ「砂漠に行きたいって言ったのはお前だろ?」

ナオヤ「おう」

アッシ「さ、行くぞ」

ナオヤ「え！？くれないの！？」

アッシ「甘えるな」

ナオヤ「そんな！死んじゃう！いいじゃん！なっ？なっ？なっ？
しょうがねえ・・・」

アッシ「ほらよ」

ナオヤ「サンキュ！んびっんびっんびっ」

アッシ「んじゃ俺は先行ってるぞ」

俺はそういうとエリア2へと続いている坂を駆け下りた
後ろからはナオヤの叫び声が聞こえた

ナオヤ「あれ！？俺の携帯食料がねえ！」

連斗「クーラードリンク飲んでも蒸し暑いつてどんだけだよ」

俺たちはエリア7へと到着したところだった

エリア7の奥には不自然に地面から飛び出た岩

ベア「エリア1と2以外じゃあの擬態も何の意味があるのやら」

連斗「まったくだ」

俺たちは地下へ足音を響かせないようにゆっくりとその岩へと近寄
った

そしてジェスチャーで合図をしながら爆弾をセットした

連斗（爆破オーケー）

親指を立てる

ベア（行くよ）

ベアがピースサインをする

ベアは距離をとるをさっき拾っていた石ころを爆弾へ向かって投げ
飛ばした

ドッカアン！！

エリア7に大タル爆弾の爆発音が響き渡る

ギャアオーン！

爆発と同時に地面からなんと不格好な竜が飛び出た

連斗「じゃあ麻痺らせるからよろしく」

ベア「頼むぜ、そらっ！」

勢いよく斬り込んだベアは勢いよく弾かれた

ベア「なっ！？硬っ！」

のけ反るベアにバサルの尻尾回しがクリティカルヒットする

ベア「ぽけっ」

吹き飛ぶベア

それに駆け寄る俺

連斗「おっおい、大丈夫か？」

ベア「なんとかね、ここまでの硬さとは思ってなかったよ」

さすがは岩竜と言ったところか

ガンナーの俺には関係ないが

俺たちはバサルの突進を避けると再び攻撃態勢に入った

アッシ「とりあえず、このエリア2で待つか」

ナオヤ「えー熱いじゃん嫌だ」

あ？

アッシ「じゃあ探してこいよ、見つかったらペイントボールをつけろ」

ナオヤ「いやいいよ、砂漠はキノコないから暇だし」

くっ・・・

アッシ「クーラードリンクあげたつてのに態度デカイな」

ナオヤ「はあ！？お前だつて俺の携・・・」

そこまで言ったナオヤは次の瞬間宙に浮いていた

そしてナオヤのいた位置には一角獣の頭蓋骨が地中から顔を出していた

アッシ「きたか！」

ナオヤ「もげっ」

顔面から地面に落下するナオヤ

何とか生きているようだ

俺はハンマーを構えるとダイミヨウザザミに突進した

アッシ「みいいいとっ！」

振りかざされたハサミを回避すると後ろへと回り込み甲殻を叩く
アッシ「部位破壊ならまかせろ！」

ナオヤ「おう！まかせた！」

アッシ「てめえ！回復ケチんな！」

俺はキャンプへと走り出すナオヤの背中に向かって怒鳴った

t h a n k y o u f o r t h e m e a l (前書き)

ごちそうさまでした

thank you for the meal

ベア「うわっ」

のけ反るベア

連斗「気をつけろ！」

ベア「いちいち弾かれてんじややってらんないよ！」

嘆くベアにバサルの巨体が突っ込む

ベア「おあっ」

それをギリギリで回避するベア

連斗「そろそろ麻痺るぞ！」

ベア「オーケー！」

それからベアが6回弾かれたのち俺はバサルを麻痺させた

ベア「ほらほらほらっ！」

ベアが弾かれながらも何度も斬りかかる

俺は弾を貫通弾へと切り替えるとバサルの腹を集中攻撃した

ここを壊せばベアも弾かれずに攻撃できるはずだ

連斗「ばあああまつ！」

俺の連射が効いたのかバサルの腹にヒビが入る

連斗「ベア！今だ！」

俺の合図でベアが腹に斬りかかる

そして弾け飛ぶバサルの腹

岩のような皮膚の下にあるもう1つの赤い皮膚が露出する

しかし破壊と同時にバサルは雄たけびをあげた

ゴオオオオ

そのあまりの轟音に耳を塞ぐ俺とベア

思わず目を閉じてしまっていた俺はおそろおそろバサルの様子をうかがう

するとちょうどバサルが首を振り下ろすところだった
その口に炎を湛えて

そして飛んでくる火球

ベア「もんっ・・・！」

間一髪のところでガードする片手剣

連斗「くるああああああ」

直撃をくらうライトボウガン

連斗「うっおっあっ」

地面を転がるように吹き飛ばされた俺は溶岩の1歩手前で静止した

連斗「あ、あぶねえ・・・」

ベア「間一髪だね」

俺は震える手で回復薬を取り出すと何とかそれを飲みほし立ち上がった

連斗「この野ろ・・・」

バサルのいた場所には砂煙と共に地面へと消えていく尻尾があった

ナオヤ「いくぜえ！」

ダイミョウの顔面に斬り込むナオヤ

アツシ「馬鹿！もつと慎重にいけ！」

ナオヤ「なあに、だいじょうべっ」

ハサミにどつかれ尻もちをつくナオヤ

言わんこっちゃない

俺はナオヤが回復に行っている間に順調にダメージを与え
殻を第1段階破壊することに成功していた

ナオヤ「いってえ・・・」

アツシ「気をつけ・・・ん？」

ダイミョウの姿が見当たらない

ナオヤ「わかってるよ、ったく」

そう言つて立ち上がったナオヤに影が射す

アツシ「あぶない！」

俺が叫んだときにはすでにダイミョウはナオヤをぺちゃんこに押し潰し

地中からはアイルーが現れていた
うかつだった・・・

振りむいたダイミヨウの口からは白い泡が吹かれていた
怒り状態か

そりゃ死ぬわ

高速で走りよるダイミヨウの軌道から外れると俺は再びハンマーを
構えた

アッシ「ぐっ」

その時ふと身体に異常を感じた俺は片膝をつく
足が震えて立っていることすらまなならない

ダイミヨウはそんな俺に容赦しなかった

圧縮された水のプレスが俺を直撃する

アッシ「あつぶっらっ」

転がりながら吹き飛んだ俺にすかさずにじみよるダイミヨウ

俺はよろよろと立ち上がると震える手でモドリ玉を足元の砂へと叩
きつけた

俺を包む緑の煙

空を切り裂くダイミヨウのハサミ

ナオヤ「どうした？死んだのか？」

当たり前だがキャンプにはナオヤがいた

アッシ「そんなわけあるか」

俺はポーチからこんがり肉を取り出すと一気にたいらげた
アッシ「・・・よし！行くぞ！」

俺は震えの収まった脚で再びエリア2へと走り出した

連斗「爆弾あるか？」

ベア「1つだけ」

連斗「んじゃ頼んだ」

俺たちはバサルを追いエリア6へと移動していた
それにしてもここは他エリアと比べるとさらに熱い

したたる汗が地面に水たまりをつくりそうな勢いだ
早くケリを付けないと干からびちまいそうだぜ

バカァン！

ゲャォース！

俺はベアの爆弾で地上に再び現れたバサルモスに照準を合わせると
通常弾を連射した

連斗「くるばあ！」

部位破壊を完了したためにベアの攻撃も弾かれなくなりかなりスム
ーズに戦いは進行していた

ベア「へいへい！」

バサルの腹を切りつけるベア
グウウ

その時だった

バサルが雄たけびを上げると翼を広げ態勢を低くした
まずい！

バサルから紫色のガスが噴き出しベアを包む

ベア「ぐえっげえっろえっ」

苦しそうにもがき苦しむベア

思わずしゃがみせき込む

連斗「あつ危ない！」

俺がそう叫んだときにはベアはバサルの突進に直撃し吹き飛ばされた
ベア「ウボロロロロロロロ」

何とか起き上がったベアだったがその場で嘔吐するとダウンした

そして現れたアイルーと共に姿を消した

毒ガスには要注意だな

まあガンナーの俺には関係ないこった

俺は照準を腹に合わせると通常弾を撃ち込みまくった

連斗「ばああああああ！」

怯むバサル

連斗「まっまっまっ！」

バサルが突進で近寄るとそれを回避し距離を取る
ガンナーの敵じゃないぜ

俺がそんな作業を13回ほど繰り返したのちにベアが復帰した
ベア「悪いね！今度はそうはいかない！」

ベアはそう言うバサルに斬りかかる

そして尻尾振りを回避すると腹にもぐりこみ斬りつける

その時だった

ギアアアアン

バサルが雄たけびと共に倒れ込みそのまま動かなくなった

連斗「あれ？」

ベア「あら？」

・・・そうだ忘れてた

バサルは瀕死の兆候が見られないんだっただけ

連斗「悪い、捕獲できなかったな」

俺はそう言うポーチの中のシビレ罠とベアを交互に見つめた

ベア「まあ、クリアできただけいいとしましょ」

俺たちはバサルの素材を剥ぎ取るとピッケルを取り出し火山を巡った

ナオヤ「もうだめ・・・」

ナオヤはそう言う倒れ込んだ

アッシ「しっかりしろ！」

そういう俺も結構限界が近かった

ペイントボールをつけ忘れたためにダイミヨウを見失い俺たちは完全
に迷子状態だった

ナオヤ「何でこんな熱いエリアばっか探すんだよ！」

ナオヤが愚痴る

アッシ「じゃあ他のエリアに行くか？」

俺たちはエリア7へと入った

ダイミヨウの移動するエリアはだいたい1、2、5のどれかなんだ
からそっちを回っていたほうが効率がいいだろ

そんな都合よくここにダイミョウがいるわけ

ナオヤ「いた！」

いたな、うん

ナオヤ「うおらああああ」

ナオヤがダイミョウに突進し武器を振り下ろす

ギョエ

いきなりの攻撃に食事中のダイミョウは驚いたようだった

そしてダイミョウはこちらの存在に気付いたようでハサミを振りあげると横走りで突進してきた

アッシ「ふおっ」

俺はそれを回避しハンマーを構える

ナオヤ「いくぜええ！」

ナオヤはそう言うのと溜め行動に入った

それを見たダイミョウは態勢を固め動かなくなる

殻にこもってもハンマーの俺には関係ないぜ！

俺は殻を集中攻撃した

ナオヤ「よっっっ！！」

ナオヤの溜め3がダイミョウに炸裂する

これはさすがのダイミョウもきいたらしくハサミを振りあげると白い泡を噴き出した

怒り状態か

アッシ「気をつける！」

ナオヤ「わかってるわ！」

ダイミョウは再び宙に飛び上がるとナオヤめがけて振ってきた

ナオヤ「同じ手を食らうかよ！」

ナオヤはそう言うのとガード態勢をとり身を固めた

しかし怒り状態のダイミョウのプレスを防げるはずがなくあっけなく吹き飛ばされた

ナオヤ「んぎ」

アッシ「ナオヤ！」

よかった

生きているようだ

アツシ「回復するんだ！」

ナオヤ「もうない・・・」

な、なんだと!?

アツシ「くそが・・・間に合え！」

俺は死に物狂いで走りダイミヨウとナオヤの間に入るとハンマーを構えた

ナオヤをみると完全にビビりきっているようだ

アツシ「じつとしてな、後は俺がやる」

俺はハサミを振りあげたダイミヨウの側面に回り込むとハンマーを叩きつけた

そして再び宙に飛び上がったダイミヨウのプレスを避けるとすかさず背後に走り寄り溜め3をお見舞いする

弾け飛ぶ一角獣の頭蓋骨

俺はその破片を身に受けながら溜め3回転からのホームランフィニッシュと共に叫んだ

アツシ「これで・・・満腹だ!!!」
フィニッシュ

ギギエエ・・・

ダイミヨウは両ハサミを振りあげるとダウンしそのまま動かなくなつた

アツシ「ごちそーさん」

俺はそういうとハンマーを背負いたため息をついた

ナオヤ「やるじゃねえか」

遠くからナオヤがぼざく声が聞こえる

俺はナオヤの存在を思い出し歩み寄った

アツシ「偉そうに、帰るぞ」

俺がそう言つてナオヤを抱き起そうとしたその時だった

次の瞬間ナオヤは宙に浮いていた

そしてナオヤのいた位置には一角獣の頭蓋骨が地中から顔を出して

いた

アッシ「んれ？」

ズズウ

地面から這い出るダイミョウザザミ

アイルーに運ばれるナオヤ

俺はとつさに後ろを振り返る

そこには動かなくなったダイミョウザザミ
前を見る

そこには両ハサミを高々と掲げたダイミョウザザミ

俺は目をこすり頬を叩いた

そのダイミョウは高速横走りで俺との距離をつめてくる

アッシ「あ・・・あぶらあああああ！！」

俺はダイミョウに背を向けるとわけもわからずキャンプへ逃げ帰り
急いでクエスト情報を確認した

アッシ「い、一体どうなっ・・・」

ダイミョウザザミ大量発生！

・・・あん？

ナオヤ「不意打ちとは卑怯な蟹だ」

アッシ「お前これどういう・・・」

ナオヤ「ああ、沢山いたほうが早く素材集まると思ってたな、あと1
匹くらいいいけろっ」

俺はナオヤにラリアットをかますとネコタクチケットを納品しさと
さど砂漠を後にした

t r u t h i s f o o l i s h (前書き)

眞実はくだらない

truth is foolish

クエストに行く予定のない日の午後はNSJのメンバーが集会所に集まってお茶するというのが日課になっていた

今日も雑談に花が咲く

連斗「そういえばさ、ナオヤってタカマサと相当仲が悪いみたいだが何があっただ？」

アツシ「さあな、兄弟ってことすら知らなかった俺たちが知るわけないだろ」

たしかに

ベア「でも気にはなるよね」

たしかに

連斗「いつちょ聞いてみるか」

席を立った俺の腕をベアが掴む

ベア「思い出したいくない過去かもしれないし、古傷には触れないほうがいい……」

連斗「大丈夫だろ、この前の体調不良もフリだったしな」

俺はナオヤに鉱石をたんまり使われたことを思い出した

連斗「それに借りも返していない」

俺はそう言つと最近村長が作り出した農場へと向かった

ナオヤは農場がお気に入りらしく毎日のように虫あみを振っている農場へ足を踏み入れるとさっそくナオヤの声が風に乗って届いた

ナオヤ「釣りミミズゲット！そんじゃお次は釣りと行きますかあ？」

連斗「おい」

ナオヤ「ぬおっ」

俺の声に驚いてミミズを落とすナオヤ

ミミズは慌てて地面に潜るとそのまま姿を消した

ナオヤ「ぬうあ！何すんだ！」

ナオヤが慌てて素手で地面を掘る

連斗「タカマサのことだけだ」

俺がそう言つとナオヤの動きがぴたりと止まった

連斗「結局あいつのギルドには入らないのか？悪い話じゃないと思うが」

ナオヤ「・・・お前には関係ないだろ、俺にはNSJがある」

連斗「なんなら俺たち全員で移籍つてのも・・・」

ナオヤ「やめろ！！」

ナオヤは立ち上がると俺の胸ぐらを掴んだ

土で防具が汚れる

ナオヤ「忘れさせてくれよ・・・彼女はもう戻って来ないんだ・・・」

「

ナオヤはそういうと釣り場へと歩きだした

俺はちよつとした罪悪感を感じながらも集会所に戻るとみんなに話を聞かせた

アッシ「え？彼女？」

ベア「母親か誰かな？」

連斗「するとその母親をタカマサが・・・？」

アッシ「あの精鋭ハンターに限ってそんなことを？」

ベア「・・・ありえなくはないね」

謎は深まるばかりだ

ケン「なにに？新しい素材でも手に入れた？」

連斗「いや何、タカマサの話題さ」

ケン「ああ、隊長の」

連斗「ん？」

ケン「あついやほら、ギルドの隊長でしょ？」

連斗「ああ、そいつとナオヤの関係の話さ」

ケン「あんなことがあつたんじゃそりゃね・・・」

ベア「え？」

アッシ「何だつて！？」

連斗「知っているのか！？」

ケン「・・・まあ、隊長とは付き合い長いしね」

こいつ一体何者だ

連斗「・・・あいつらの間に何があったのか俺たちは仲間として知っておく必要があると思うんだ」

ケン「わかったよ、その・・・実は・・・」

ケンがしぶしぶ語り出し俺たち3人は息をのむ

ケン「子供のころ・・・」

こ、子供のころ・・・？

ケン「・・・ナオヤが大切に育てていた女王セツチャクロアリをタカマサが逃がしてしまったんだ」

そんっ・・・え？

ケン「それから2人は犬猿の仲ってわけさ」

ベアとアツシの2人が立ち上がる

ベア「さ、防具の手入れをしなくちゃ」

アツシ「俺もアイテムの整理をしないと」

連斗「くだらねえ・・・」

俺もそう呟くと席を立ち集会所を後にした

s t a r t i n g p o i n t (前書き)

原点

s t a r t i n g p o i n t

これはこの物語の主人公である俺がこの村、マスク村へ来て間もない頃の話だ

オカ「私が村長のオカ・シモだ、これからよろしく頼むよ」

ケン「僕は受付のケン・ハイ・ストマッチ、よろしく！」

ケンが手を差し出す

俺はそれをシカトするとクールに名乗った

ナオヤ「俺の名はナオヤ・スネ・ジャングルネ」

ケンがしよくれた顔をして手を下げる

ナオヤ「それじゃあ依頼されたクエストにさっそく出発させてもらう、確か内容は・・・」

ケン「隣村の畑がドスランポスに荒らされているみたいで、そいつを狩猟するんだ」

ナオヤ「わかってる、任せろ」

オカ「ほほ、期待してるじよ」

ふん、ドスランポスか・・・

一体どんなモンスターなんだろうか

ナオヤ「それじゃあ1時間後に出発する」

俺はそう言つと集会所を後にした

ケン「ところで村長、あのハンター大丈夫なんですか？」

オカ「しかたないじやろ、この村は金がないんじや、雇えるハンターなんて新米だけだ」

ケン「そうですね、でもあの自信を見る限りでは中々腕のよさそうなハンターみたいですし、よかったですね」

オカ「まったくじや、この村の未来も安泰じやな」

ケン「そしてあのハンターが立派に成長してくれば依頼も増えてこの村も大きく・・・ニヒヒ」

オカ「まあハンターはナオヤ1人だけじゃからそう簡単には行かないじゃろうけどな」

ケン「もう1人くらい空から降って来たりしないかな、くるくるっで」

オカ「くだらんこと言っでないでクエスト受注じゃ」

ケン「はい」

ナオヤ「フスウ」

息を吸い込む

ナオヤ「ンペア」

息を吐く

森の創る新鮮な空気と潮の香りがほどよく合わさり俺の鼻孔をくすぐる

両手を広げると俺の裸体を潮風がすり抜けていく

心地よい風に爽やかな日差し

これが密林のキャンプか

悪くない、悪くないよ

俺は目の前にある青い箱に歩み寄るとそつとフタを開けた

ナオヤ「ふん」

俺は中を見回すとその中身をポーチにしまい込んだ

ナオヤ「さて、まずはエリア1から探索するとするか」

俺はそう呟くと地図を片手にキャンプを後にした

ナオヤ「ん・・・？こっ・・・これ・・・は・・・！！」

俺は足を止めしやがみこんだ

そして足元にあるそれをそつと手で包み込み

ゆっくりと持ち上げた

その身に日差しを受け美しく輝いているそれはまさに神が創りだした結晶そのものだった

完璧とも言っでいいその曲線に美しいまだらの模様

これが・・・

ナオヤ「特産キノコか・・・！」

ブヒブヒ

ん？

俺の足を誰かがつつく

ナオヤ「何だ？」

足元をみるとそこには俺の体重よりもはるかに重いであろうデカイ
ブタがいた

体中に苔が生えていて見るからに汚そうだ

ナオヤ「ふん、下品な奴だ、あっちへいけ」

俺はブタを思い切り蹴飛ばすと再びキノコを採集しようとしやがみ
こんだ

ブツビ！

ナオヤ「どうお！」

強い力で後ろからどつかれた俺は顔面から地面へと突っ込んだ

ナオヤ「ぬぢっ」

振り向くとそこには今にも再びこちらへ突進をかまそうとするブタ
の姿があつた

ナオヤ「ほ、ほう・・・俺とやろうつてのか、いい度胸じゃぶっ」

俺がセリフを言い終わる前にブタは俺のスネへと頭突きをかました

ナオヤ「かぶっ！」

俺はあまりの激痛に思わず飛び上がった

ナオヤ「ぐぎぎぎ・・・」

スネを抑えながらもブタをみようとするが涙でかすんでよく見えない
その頭は突進用なのかはわからないが丸く突き出ている硬質化して
いるようだった

ナオヤ「どうやらお前は俺を本気にさせたようだな」

俺はそついうと背負っていた武器、大剣ポーンブレイドを掴み、そ
して構えた

ナオヤ「ほぐっ」

一瞬何が起きたのかわからなかった

俺は肩に激痛を感じ思わず武器を離してしまっていた

まさかここまでの重さとは・・・やるじゃねーか

俺は深呼吸をすると再び大剣を構え、振りかぶり、そして振り下ろした

ナオヤ「よつつつ!!!!」

俺のキノコを漁るクソブタに俺の大剣が制裁を加えた瞬間だった
ブビツビイ・・・

ナオヤ「ふん・・・」

ブタの鮮血を拭くと俺は剥ぎ取り用の小型ナイフを取り出しブタのその身に突き刺した

形が崩れないように丁寧に皮を剥ぎ肉を切り取る

・・・生肉か、後で焼いてみよう

それから俺はキノコの採集ポイントに目を向けたが既にブタが食い荒らした後で採集できそうな物はなかった

ナオヤ「エリア9だな」

俺のキノコハンターとしての勘がエリア9に反応した

そこにはキノコ採集ポイントが少なくとも2つはあるに違いない
俺はそう確信するとエリア9へと続く段差を上った

ナオヤ「ほう、池か」

エリア9についた俺は小さな池を見つけ歩み寄った

中々沢山の魚がいるようだ

釣ってみたいがあいにく釣り餌は手元がない

しょうがない、フィッシュハントはまたの機会ってことにするか

俺は再びキノコを求め歩き出した

その時だった

ブグザア

いきなり地中から何かが飛び出し俺のボディを強打した
ナオヤ「にやぐっ」

俺はあまりの激痛に声も出せず転げ回った

ナオヤ「ひっひっひっひっ・・・」

何とか起き上がりさつきまで俺のいた場所をみるとそこには見たこともないようなデカイ蟹がいた

俺と目が合った蟹はハサミを振り上げ高速横走りで俺との距離を詰めてきた

ナオヤ「ぴっぴぎゃあああああああああああ」

命の危険を感じた俺はエリアの奥へと猛ダッシュで逃げた

しかし数歩足を運んだ地点で俺は再び地中からの奇襲に合い

次に目覚めたときはキャンプの砂浜で心地よい日差しをその身に受けていた

俺は肉を焼いていた

あいつから逃げられなかったのはスタミナが足りなかったせいだ

そもそもあんな森の中に蟹がいるなんておかしいだろクソが
密林の中心部へは違うエリアから侵入したほうがよさそうだ

俺は勢いよく地図を開く

勢いをつけすぎ地図が真っ二つに裂け俺はその勢いで転げた

ナオヤ「くそ！なんなんだよ！」

立ち上がり肉をみると真っ黒な焦げ臭い煙を上げていた

ナオヤ「くそ！」

落ち着け、落ち着くんのだ、真のハンターはこんなことには動じない
俺は安全だと思われるエリア4を経由して密林の中心部へ乗り込む
ことにした

ナオヤ「もうキノコだとか蟹だとかにかまっている暇はねえ・・・
全力で行く！待ってるよドラゴンポス！！」

俺は焦げ肉を海へ投げ捨てるとエリア4へと疾走した

ナオヤ「行くぜよ！」

周りは見渡す限りの水平線

眺めているだけで思わず気が遠くなりそうだぜ

俺にそんなものを見ている暇はないがな

ナオヤ「ふおおおおおおおおおお」

疾走することに夢中だった俺は目の前の地中から噴き出していた砂煙に気がつかなかった

ナオヤ「んぎ」

俺は地中から現れた蟹の奇襲を受け海へと投げ出された

ナオヤ「じゃぼっばっばえっ」

思わず溺れそうになりながらも慌てて態勢を立て直す

な・・・何でこんなところにも・・・って砂浜だから妥当か

そっそんなことを考えている場合じゃない！

俺は立ち上がると武器を構え再び俺ににじみよってきたヤオザミの攻撃を防いだ

ナオヤ「慌てんなって、お前の相手ならたっぷりとしてやるぜ！」

俺はそう言うで大剣を振り下ろした

ヤオザミの脳天に直撃した、一応ガンッ

攻撃が勢いよくはじかれた俺は思わず尻もちをついた

ナオヤ「なっ・・・固っ・・・」

ゆっくりと振り向くとそこにはハサミを振り上げ俺ににじみよるヤオザミの姿があった

ナオヤ「こっここれは夢だ、ゆ夢なんだ、こんなことがあっていいはずがないんだ」

俺は目を閉じた

そして祈った

・・・

目を開けるとそこはキャンプだった

ほら夢だった

輝く日差しが眩しいぜ

俺はゆっくりと立ち上がると叫んだ

ナオヤ「さあ！ドスランポス狩獵クエストの始まりだ！」
それから俺は走り去るアイルーたちを背にツタを登り始めた

ここがエリア5か

ここなら水は一切ないようだし安心だぜ
さて、エリア6にでも向ってみるか

エリア6へと続く洞窟の前で立ち止まる

洞窟か・・・いかにもモンスターの巣って感じだぜ

俺は覚悟を決めると目の前の洞窟へと飛び込んだ

ナオヤ「・・・なんだ、シヨボイ巢だぜ」

俺はただ骨が敷き詰められただけのエリア6に少々がっかりした
もつとこう、何というか派手なのを期待したが意外と質素だな

ナオヤ「ほんとうにここがエリア6かあ？」

俺は地図を取り出し確認しようとした
ん？

地図がない

どうやらエリア5に落としたようだな

俺がエリア5へと戻ろうと振り返ると赤いトサカの青い恐竜が飛び
かかってくるのが目に入った

ギヤアン！

ナオヤ「」

俺が何かしらの音を発する前にクエストは終了していた
地図を取りに戻る必要はなくなった

俺は

帰りの船の中で

静かに

泣いた

k i n g l i k e s f l a m e (前書き)

王は炎が好き

king likes flame

ベア「悪いけどクエストに付き合っただけなんだ」

連斗「ああ、かまわんよ」

ナオヤ「クエストによるな」

お前は別に来なくてもいいがな

アツシ「何の素材が欲しいんだ？」

ベア「リオレイアさ、武器がこれだから防具もレイア一式にしよう
と思っただけ」

ベアはそう言うと言った愛用武器のプリンセスレイピアを撫でた

連斗「じゃあ今夜にでも出発するか」

アツシ「オーケー」

ナオヤ「はあ？急すぎるだろ！いくらなんでもよお！」

ベア「沼地にはキノコが沢さ・・・」

ナオヤ「早くしろ、あまり待たせるなよ」

ナオヤはそう言うところかへ駆け出して行った

連斗「・・・じゃ、そういうことで」

アツシ「今夜な」

ベア「悪いね、頼むよ」

それで俺たちは解散し夜に再び集まると張り切るナオヤを先頭に沼地へと出発した

ナオヤ「うおおおおおー！」

クエスト開始直後

ナオヤは猛ダッシュで支給品をあさると速攻でキャンプを後にした
連斗「何なんだあいつは」

アツシ「相当キノコが好きらしいな」

ベア「まったく、採集しすぎてクエストに影響しなきゃいいけど」
連斗「まったくだ」

俺はそういうとまず最初に携帯食料を確保し他の支給品をポーチに入れた

連斗「さ、行くか」

俺は悔しそうに肉を焼き始めたアッシを尻目にキャンプを後にした

連斗「俺とアッシはエリア8でレイアを待つ、ベアはナオヤを探してくれ」

アッシ「頼んだぞ」

ベア「りょーかい」

俺たちはそういうと2手に別れた

エリア8についた俺は暇つぶしに虫とりをした

このエリアは腰あたりまで高さがある植物が密生していてやかましいがその分虫が豊富なのだ

連斗「お、光蟲ゲット」

アッシ「おかしいな、ブルファンゴがない」

アッシは遠くでブルファンゴ狩りのようだ

連斗「ヤベ、ロイヤルカプトじゃん」

アッシ「それにしても妙に静かだな、今日の沼地は」

遠くではアッシがブルファンゴを探しているようだった

連斗「今度はドスヘラクレス」

アッシ「おい！」

遠くでアッシが叫んでいた

連斗「んん？」

アッシ「あれ・・・」

アッシが指を指すほうを見るとなにやら大きな塊が見えた

俺はそれに何か嫌なものを感じると虫あみを放り出しアッシの元へと駆け寄った

ベア「エリア1から順番に見ていくとするか」
まったくどこに行ったのやら

ベア「まあ探すついでに採集くらいしてもいいよな」

僕はさういうとエリア1の隅にあるタル置き場へ向かった
タル置き場といっても残骸ばかりで使えるものはほとんどないんだ
けど

ここはメラルーたちのごみ置き場みたいな所にもなっていてたまに
掘り出し物があるのさ

ベア「爆薬・・・なぞの頭骨・・・ううん・・・」

でも今日はゴミしかないみたいだ

僕は立ち上がると再びナオヤを探し始めた

ベア「それにしてもモンスターが一匹も見当たらないな・・・」

僕は静寂に支配された沼地に違和感を覚えながらもナオヤ探しを続
行した

エリア2に到着し辺りを見回すがナオヤの姿はない

ベア「いないか、一応ここにもキノコはあるんだけどな」

そんなことを言いながらキノコ採集ポイントに向かった

そこには真新しいであろう掘り起こされた跡と足跡が残されていた
ベア「ったく・・・」

僕はため息をつきながらその足跡を追いエリア4へと向かった

エリア8の一番奥のほうに何やらドデカイ塊が見える

連斗「一体なんだ？」

アッシ「わからん・・・」

アッシもそれには何か嫌なものを感じ取ったらしく1人では近寄ろ
うとしない

俺たちは顔を見合わせると言葉を交わすまでもなくその物体に歩み
寄った

連斗「こ・・・こいつは・・・!」

アッシ「・・・どういうことだ？」

そこにあった塊

それはリオレイアの死骸だった

連斗「他のハンターとクエストが重なったか？」

アッシ「このクエストは依頼されたものではないからそれはないはずだが・・・」

俺たちは啞然と立ち尽くしていた

死骸はまだ新しいようだった

アッシ「おいこれ」

アッシがレイアの死骸を指差す

アッシ「この傷ハンターが付けたにしてはデカすぎるし深すぎないか？」

言われてみればそんな気がしなくもない

それに何だか所々黒く焦げたような傷もある

連斗「別にそんな深く考えても何もねーよ、さっさと剥ぎ取ろうぜ」
俺がそういった時だった

辺りが急に蒸し暑くなった

アッシ「ん・・・何だか急に暑くなったな」

連斗「まるで火山にいるみたいだ、何だこれ」

アッシ「この気温の変化に静かすぎる過ぎるフィールド・・・」

アッシが呟いた

連斗「ん？」

アッシ「それにまだここに来てから一匹もモンスターを見ていない、
何かがおかしい」

言われてみれば確かに

アッシ「退散しよう」

そういつて俺たちがキャンプへ戻ろうと振り向いた時だった

1つの影が俺たちの進路に現れた

ベア「ナオヤ！」

僕はエリア4にナオヤの姿を確認すると駆け寄った

ナオヤ「あわっ、あぶねえ！」

どうやらナオヤは夜の沼地に湧きだす毒液の中に浸かっているキノ

コを取ろうとしているようだっ

ナオヤ「集中してんだ！話しかけんな！」

ベア「ナオヤ、何か変だ」

ナオヤ「おう、キノコがないのは俺が採ったからだ」

ベア「違う、モンスターがいないんだ、おかしいと思わないかい？」

ナオヤ「夜だから寝てんじゃない？」

ベア「ナオヤ、僕は真面目に……」

僕がそこまで言った時だった

ナオヤ「のわっ」

ナオヤは態勢を崩し毒沼に顔面からめり込んだ

ナオヤ「びえつのぼっんべろっ……」

慌てて毒沼から這い出したナオヤはそのまま仰向けに倒れた

そしてゲロを吐きだした

顔面がゲロまみれになり自分のゲロで軽く窒息している

ベア「まったく……」

僕は痙攣するナオヤを起こし漢方薬を飲ませると落ち着くのを待ち

アッシと連斗を探しにエリア8へと向かった

俺たちは2人は啞然と立ち尽くしていた

俺たちの前に舞い降りたそれは毅然とした様子で俺たちの前に立ち塞がった

それは炎をまといエリア8に密生している植物を焼き払いながら俺たちを見据えた

その姿は王と呼ぶに相応しかった

連斗「炎王龍……」

アッシ「テオ・テスカトル……」

俺たちはそう呟くのが精いっぱいだった

次の瞬間にはテオは雄たけびをあげていた
どちらが速かっただろう

同時かもしれない

テオが走りだしたとき俺たちは何故か逃げなかった

上手く説明できないが

ビビっていたんじゃない

俺はテオの突進を回避するとすかさず貫通弾を撃ち込んでいた
アッシをみると防具を焦がしながらも立ち回っていた

そう

俺たちは王に戦いを挑んだのだ

h o t o n e i s n o t o n l y y o u (前書き)

熱いのはお前だけじゃない

hot one is not only you

エリア8に入った僕は驚いた

密生している植物が音を立てて燃えているのだ

そしてまるで火山のように蒸し暑い

ナオヤ「んじゃありゃあ！」

ナオヤが指差す先を見る

そこには紅い鱗をまとった獅子と戦うアッシと連斗の姿があった

ベア「一体どうなってる……」

ナオヤ「やべっ……急にスネの調子が……」

ナオヤが後ずさりする

ベア「まずい押されている！早くサポートしないと！」

僕はそういうと2人の元へ駆け出した

ナオヤ「ちょまっマジかよ！」

ナオヤも1人で戻るわけにはいかないようでした。しぶしぶ後から付いてきた

アッシ「何て暑さだ！攻撃してるはずなのにこっちが倒れそうだ！」

アッシはそう言うのとテオから距離を取った

連斗「あの炎を消すには角を破壊しかないが……龍属性の武器なんて俺たちは……」

ベア「毒でも消えるでしょ」

アッシ「ベア！」

ベアとナオヤが合流しテオとの戦闘に加わった

連斗「悪い、頼むぜ」

ベア「ああ！」

ベアはそういうとテオの突進後のわずかな隙を狙いプリンススレイピアで斬りつけた

ナオヤ「ふん、どちらが熱いか……その身をもって知るがいい！」

レッドウィングを背負ったナオヤがテオに向かって駆けだす

アッシ「俺の水だってこの程度の火を消すくらいのは出来るぜ！」

アッシがナオヤの後を追う

俺はその後ろから援護射撃だ

ベア「そらそら！」

ベアの攻撃によりテオは毒状態になったようだった

テオを覆っていた炎が弱くなる

連斗「今だ！」

4人で一斉攻撃を仕掛ける

グオオオ

しかしテオは怯むどころか炎のプレスを吐きだした

アッシ「ぶひっ」

間一髪のところであッシがそれを回避する

アッシ「あんなのに直撃したら焼き豚だぜ・・・」

しかしテオはそれを見逃さなかった

すかさず突進をかますとアッシを吹き飛ばした

アッシ「あぶらっ」

壁に叩きつけられたアッシはそのまま倒れこんだ

ギオオオ

すかさずテオがアッシに飛びかかる

テオがアッシに爪を立てようとしたその時だった

辺りが閃光に包まれた

ベア「一時撤退だ！」

連斗「くそっ」

閃光に混乱して暴れまわっているテオを背に俺とベアは二人がかり

であッシを抱えるとエリア6へと撤退した

ナオヤ「俺色に染まりな」

ナオヤはそう言うところから方向に向かって暴れているテオにペイントボールを投げつけエリア8を離脱した

アッシ「ぶひ・・・」

アッシの怪我は思ったよりも酷くはなくベアの手当てで済んだ

ベア「それにしても・・・」

ベアはアッシに包帯を巻きながら言った

ベア「まさか古龍がいるとはね・・・」

連斗「まったくだ、予想外すぎる・・・」

俺は炎をまとった獅子の姿が頭から離れなかった

ナオヤ「で、どうすんのよ」

ナオヤが核心を突く

連斗「正直なところ、今回はシェンのときのようにはいかないだろう・・・」

俺は本音を言った

ベア「そうだね、ここは大人しく・・・」

ベアも俺の意見に賛成らしく帰りの気球の準備に取り掛かろうと立ち上がる

そのベアの手首をアッシが掴んだ

アッシ「笑わせんな、こんな無様にやられて逃げられつかよ・・・！」

ベア「気持はわかるけど・・・今回は今までとはわけが違うんだ」

ベアが無理やり歩き出す

アッシ「俺たちならやれる、今まで何度も奇跡を起こしてきたじゃないか」

連斗「アッシ・・・」

こうなったアッシを説得するのは不可能だろう

ベアもそれはわかったようだった

ベア「ふっ・・・わかったよ、その代わり」

ベアがほほ笑む

アッシ「・・・何だ？」

ベア「ぜ・・・」

ナオヤ「全力で行くぞ！」

ここで割り込むのかお前は

俺たちはちよつと不機嫌そうなベアが取り出した地図でテオの居場所を確認すると再び炎の中へと飛び込んだ

t o s c o r c h i n g o u t s k i r t s (前書き)

灼熱の果てに

to scorching outskirts

エリア8へ戻るとテオはまだそこにいた

背筋を伸ばしまるで俺たちを待っていたかのようにこちらを見据えた

アッシ「借りは返させてもらうぜ！」

アッシはそう言うのとテオに向かって走り出した

ナオヤ「抜け駆けは許さんぜ！」

ナオヤが後続く

ベア「サポート頼んだよ」

連斗「おう」

俺はそう言うのと駆けるベアの背後からボウガンを構えた

アッシ「ぶああ！」

アッシがテオの顔面にハンマーを叩き込む

ベア「ほいほい！」

ベアは細かい動きでテオを翻弄し状態異常へと持ち込む

ナオヤ「お前なんて俺の相手じゃねーんだよ！」

ナオヤはそう言うのとテオの後ろ足を斬りつけた

ナオヤ「死角あり！」

その時だった

テオが立ち上がり雄たけびを上げた

ガギヤアアアオン！！

怒り状態か！

俺はここぞとばかりに麻痺弾を撃ち込む

怒り状態のうちに少しでも時間稼ぎをしなければ！

ガウ！

テオは雄たけびに耳をやられていたナオヤをバックステップによつ

て吹き飛ばした

ナオヤ「べらっ」

そしてまるでナオヤ以外の者が視界に入っていないかのようにナオ

ナオヤ「どりゃ！こなくそ！」

いつの間にか帰ってきたナオヤも攻撃に参加した
いける・・・！

俺がそう確信しかけた時だった

テオが麻痺を破ると再び雄たけびを上げた

ギヤアン！

テオを包む炎が復活しあたりを火の粉が包み込んだ

そして一瞬の静寂が訪れた

俺は何かを感じるとつさにテオに背を向けて走り出していた
その直後だった

俺の背後で空間が爆発し辺りは炎に包まれた

ベア「のああああ！！」

アッシ「しゅがあっ！！」

ナオヤ「んぎ」

遠くからの仲間の絶叫が耳に入り俺はとつさに振り向いた

そこには一面の炎の海とその中心に佇むテオ

そしてその視線の先には瀕死のダメージを負い倒れ込んだ3人の姿
があった

俺は走り出した

何も考えていなかったわけじゃない

この一瞬で俺の頭は1つの答えを導き出していた

ガンナーの俺は怒り状態のテオの攻撃をくらったらひとたまりもない
だからここから弾を撃ってテオの気を引くのが普通だ

だがもしテオが俺ではなくあいつらを先に片付けるという選択肢を
取ったら？

俺は弾なんかよりもアイツの気を引けるであろう方法を選んだ

連斗「ばああああ！！！」

俺はテオの後ろ脚をボウガンで殴りつけた

連斗「まっ！」

何度も

連斗「まっ!!」

何度も

連斗「まっ!!!」

何度も

最初は蚊にでも刺されていたような感覚だったのか見向きもしない
テオだったが何度も殴るうちにかゆみを感じたらしく首をこちらに
向けた

俺は灼熱のシールドで体力を削られながらも叫んだ

連斗「逃げろ!!!」

テオのプレスに焼きつくされる俺が最期に見たのはエリア8から何
とか逃げだす3人の姿だった

f i r e m e n (前書き)

消防士たち

f i r e m e n

ゆっくりとまぶたを上げる

そこには俺の顔を覗き込むアッシとベアの姿があった

連斗「ぐっ・・・!」

身体を動かそうとするが激痛がそれを妨げる

ベア「動いちゃダメだ、今栄養剤を作るから」

どうやら俺も誰かさんでおなじみのベースキャンプに運ばれたらしい俺はあたりを見回した

すると俺の頭に1つの疑問が浮かび上がった

テオのこともそうだがこれはもつと気になった

連斗「なあ・・・」

アッシ「大丈夫だ、テオなら・・・」

連斗「なんでナオヤも俺の横で倒れてるんだ？」

俺は口から泡を吹き痙攣しているナオヤを横目で見ると言った

アッシ「ああ・・・お前をドキドキノコで回復させようとしやがったから本人に食わせたら毒と臭いと疲労状態になって倒れ込んだんだよ」

アッシがあきれ顔で説明する

連斗「命の恩人だな、礼を言うぜ」

俺はほほ笑んだ

アッシ「いや連斗、礼を言うのは・・・」

連斗「おっと、その続きはこのクエストをクリアしてからだぜ」

俺はそう言うときベアが作った栄養剤を飲みほし立ち上がった

ベア「ゴホンゴホン」

ベアが咳払いをした

どうやら何やら言いたいことがあるらしい

ベアが口を開いたその時だった

ベア「ぜ・・・」

ナオヤ「全力で行くぞ!!!」

栄養剤の余りを飲み回復したナオヤはそう叫び起き上がった

エリア8の植物はすべて燃え尽きもはやそこは焼け野原だった

俺たちはすかさずテオを取り囲んだ

するとテオは息を吸い込むと動きを止めた

いきなり粉塵爆破か・・・!

連斗「くるぞ!」

俺とアツシはテオから少しでも遠ざかるために走り出した

ベアはガードの態勢をとった

だが、ナオヤは違った

ナオヤ「こここれっで・・・キメる!」

逃げ遅れたナオヤは何とかプライドを保とうとテオに斬りかかった
しかし明らかに腰が引けているし胴体を狙ったであろう刃先は尻尾
のほうへと逸れていった

ナオヤはそのまま大剣を振り下ろしたと同時に目をつぶり尻もちを
ついた

ナオヤ「びえ・・・」

死を覚悟しうずくまるナオヤ

だが辺りを包んだのはナオヤの絶叫ではなくテオのそれだった

ギャアアアア!

連斗「え」

アツシ「え」

ベア「え」

テオの尻尾が宙を舞っていた

本体から切り離されたそれは地面に落下すると鈍い音を立てた

ギヤアン・・・

テオは力なく雄たけびを上げると何とか起き上がった

そして上空へ飛び立つと沼地エリアとは逆の方向へと向かって行った

連斗「これ・・・は?」

俺は一瞬何が起こったのかわからなかった

ベア「どうやら撃退したようだね、僕たちから逃げたんだ」

ベアが武器をしまいながら言った

アッシ「待ちやがれ！くそっ！」

アッシがハンマーを地面に叩きつける

ベア「まあ、命があっただけいいとしましょ」

ベアはアッシの肩に手を添え慰めた

連斗「そうだな・・・よくやったよ、俺らは」

多少悔しい気持ちも残ったがベアの言うとおりだ

生きていてよかった

アッシ「どこまでも追い詰めてやるぜ！テオ・テスカトル！」

アッシが天に拳を向け叫んだ

その横には正反対に冷静な男の姿があった

ナオヤ「俺とお前は水平線だ・・・どこまで行っても交わらない・・・

・あばよ」

ナオヤは遙か彼方上空で翼を羽ばたかせているテオに遠い視線を送っていた

i n s e c t c o l l e c t i n g i s f a t a l (前書き)

虫捕りは命取り

i n s e c t c o l l e c t i n g i s f a t a l

連斗「なんだって？」

俺は思わず声を上げた

ナオヤ「だからあ、今まで使ってきた武器とは違う武器でクエスト行こうぜ」

太刀を背負ったナオヤが言った

ベア「もう準備してるし・・・」

アッシ「まあ、気分転換にはなりそうだな」

連斗「うつむ・・・」

まあ確かにサポートにもマンネリを感じていたのも事実だしたまには前線で戦ってみるのもアリか？

連斗「そうだな、異論がないならやってみるか」

ナオヤ「おっしゃ！じゃあ今夜出発で！」

ナオヤはそう言うのと農場へ走り去った

ベア「僕は弓でいくよ」

ベアが言った

連斗「何気に乗り気だな、俺はじっくり吟味させてもらっぜ」
アッシ「俺もそうするか」

それから俺たちは解散し各自今夜のクエストに備えた

連斗「クエストだが、行きたいクエストがある」

ベア「珍しいね、連斗が自分からなんて」

連斗「ああ、コイツとはケリをつけておかなきゃならないからな」

俺はそう言うのとクイーンランゴスタのクエストを受注した

この世界に来て初めて遭遇した敵

あの時は散々な目にあわされたが今回はそうはいかねーぞ

ナオヤ「怖い顔しちゃってえ、さっさと行くぞ」

ベア「あれ？アッシは？」

ベアがそう言ったのと同時にアッシが集会所へと駆けこんできた
アッシ「悪いな、武器選びに時間がかかった」

アッシはそういうと腕についている盾を叩いた

背中には巨大な槍

どうやらアッシはランスを選んだようだ

アッシ「連斗は双剣か」

アッシが意外そうな表情をする

連斗「まあな、前線の俺をとくと見ろ」

ベア「ふふ、自信たっぷりだね」

ナオヤ「んじゃ行くぞ！」

こうして俺たちは虫捕りへ出発した

連斗「たしかアイツはエリア6だったな」

俺は地図を広げ言った

ナオヤ「まあ虫ごときに焦る必要はない、ゆっくり行こうぜ」

ナオヤが仕切る

ベア「ところでアッシの武器は何だい？すごくデカイけど」

アッシ「バベルさ」

ランスを代表するビジュアルのイカした武器だ、属性はないが

アッシ「お前の弓は・・・クイーンプスターか」

ベアは相変わらずリオレイア素材の武器だ

ついでに俺の武器も紹介しておこう

こいつの名はアイシクルダガー

属性は氷で見た目も属性もクールな双剣さ

ナオヤ「俺の太刀は鬼斬破！」

誰も聞いていないのにナオヤが自慢げに素振りをする

太刀としては王道の鬼哭斬破刀に派生するがコイツのはまだ下位武器だ

連斗「さて、まずはエリア7でランゴスタ狩りだ」

ベア「大量発生したランゴスタを狩らないと出てこないみたいだね」

アッシ「さすがは女王様」

ナオヤ「俺はキノコ採ってから行くわ」

ナオヤはそういうと一人別エリアへ駆けて行った

エリア7へ入るとそこには今まで見たこともないほど大量のランゴスタが発生していた

言い忘れていたが俺は虫が嫌いだ

グロテスクな外見に耳障りな羽音・・・気持ち悪い

アッシ「びiiiiiiiiiiiiiiiiいふっ！」

アッシがランスを構えると同時にランゴスタの群れへと突進していく
外見と勢いが合わさりそれはまるで重戦車のようなだった

すかさずアッシにランゴスタが群がるがアッシはまるで紙切れを割くようにランゴスタを砕いていく

ベア「やれやれ」

ベアはそう言うと言を構え遠方からアッシのサポートを始めた

連斗「俺も行くか」

俺は寄ってきたランゴスタに剣を突き刺すとそのまま引き裂き飛び散る体液を背にエリア中心へと疾走した

ナオヤ「エリア1とエリア2だろ・・・あと3は行ったから次は6だな」

俺は密林のキノコをすべてこの手中に収めるべく歩を進めていた
今回のターゲットは特産キノコなんてチャチなもんじゃない

厳選キノコ、奴を狙いに行く

厳選キノコは繊細なキノコだ

ゆえに人が踏み込むことの少ないエリア6に多く自生しているとみた
ナオヤ「よっ」

俺はエリア3の段差に飛び乗りそのままエリア8をスルーしエリア6へと突入した

ナオヤ「なっ・・・!？」

俺は立ちすくんだ

そこには大量のランゴスタが耳障りな羽音とともに宙に浮かんでいたのだ

ナオヤ「はっ、俺は障害があるほうが燃えるんだよ！」

俺は太刀を引き抜くと次々にランゴスタを切り裂いていった

ナオヤ「ふん、他愛のない・・・」

チンッ

太刀を納刀した際の音が心地よい

ナオヤ「さて・・・ほう、やはりな」

俺はここぞとばかりに密生している厳選キノコが目に入り思わず笑みを浮かべた

俺がそつとキノコに手をかざしたその時だった

ブオオオオンオンオン

背後から虫が羽ばたいているような爆音が響いた

ナオヤ「クソ虫どもが、まだ生きてやがっ・・・」

太刀を引き抜き振り向いた俺の目に入ったのは人間の数倍はあろうほど巨大なランゴスタだった

ナオヤ「びえ・・・」

次の瞬間俺は毒液を浴び目を開けるとそこには青空が広がっていた
最期に感じたのは股間に広がる温もりだった

ベア「僕は周りのランゴスタをやるから二人はクイーンを！」

無数のランゴスタが飛び交う中ベアが叫ぶ

アッシ「まさか仲間を引き連れているとはな・・・強敵だぜ」

アッシがランゴスタの攻撃をガードしながらもクイーンとの距離を詰める

その瞬間クイーンがアッシ目がけ大量の毒液を吹きかけた

ブリュウウウウ

連斗「気をつける！その毒液は状態異常属性が！」

俺は叫んだ

アッシ「はん、問題ないぜ」

アッシはその巨大な盾でガードをして毒液を防いだ
しかしかなりのけ反っているようだった

アッシ「ぐっ・・・なかなかやるな、だが！」

そう言つて突進をしようと構えたアッシに無数のランゴスタが飛び
かかり次々と麻痺針を突き刺した

アッシ「ぶひ・・・」

アッシは身体を痙攣させながら倒れ込んだ

ベア「麻痺状態だ！まずい！」

連斗「くそ！」

俺はアッシの元へ駆けよるがそこにすかさずクイーンが突進をかます
連斗「ぱあっ」

俺は吹き飛ばされ壁に叩きつく

ベア「ああ！周りのランゴスタが邪魔で・・・！」

粉塵を飲み俺たちを助けようとするがランゴスタがさせなかった
ふとクイーンを見ると足をうごめかせ尾をこちらへ向けていた

毒液の予備動作だ！

俺はなんとか起き上がろうとするが腰を痛め立ち上がれない
アッシをみるとさっき倒れたその場でいまだに痙攣していた

ベアは無数のランゴスタに襲われその対応で手いっぱいのようにだ
った

終わったか・・・

俺がそう思い目を閉じた瞬間だった

ナオヤ「またせたな！」

聞き覚えのある声があったほうを見るとそこには人影があった
エリア5からの入口にあるそれは逆光を背に指を天に向けて言い放
った

ナオヤ「闇夜と共に夜空の灯火を断つ漆黒のフェニックス！俺の名
は・・・ナオヤ・スネ・ジャングル・ネ！」

そう言い放つとナオヤは閃光玉を投げた

ビィィ

閃光が辺りを包みこみ無数の叫び声が反響する

ナオヤ「今だ！」

そう叫んだナオヤはクイーンへ走り寄り気刃斬りをお見舞いする

ベアは粉塵を飲むと弓を引き絞った

それにより回復した俺は鬼人化すると痙攣しているアッシを尻目にクイーンへと駆けよった

連斗「くるばああああああ！！！！」

s t a r t (前書き)

始まり

s t a r t

気がつく俺は見知らぬ部屋にいた

連斗「ここは・・・？」

起き上がり辺りを見回す

薄暗く埃っぽい

そこは知らない場所ではなかった

忘れていただけだった

連斗「俺の・・・部屋？」

しばらく何が起ったのかわからなかった

頭がクラクラする

確か俺は・・・

連斗「ん・・・」

何かが俺の身に起こったような気がする

しかしそれが何なのかは思い出すことができなかった

ふと目の前にあるPCが目に入った

毎日、いやつい先ほどまでこれに向かっているはずだったが何だか

久しぶりに見たような気がした

連斗「モンスター・・・ハンター・・・？」

画面に表示された文字を無意識に読み上げる

そうだ

俺はモンスターハンターをやっていたんだ

そしたらいきなり・・・

・・・寝てしまったようだな

時刻をみると既に夜明け近かった

連斗「ふぁーあ」

思わず大口を開けてのあくびが漏れる

連斗「寝るか」

そう呟きベッドに入った彼はものの数分で再び眠りこんでしまった

半年後

連斗「さーて、今日もモンハンやるぜ」

連斗はそう独り言を言いながらとPCを立ち上げた

モンスターハンターを起動した彼の目に大きな文字が飛び込んできた

” モンスターハンター新作発売決定！！！！ ”

連斗「おお！！！！」

思わず声が漏れる

待ちに待った新作か！

そろそろこのバージョンにも飽きてきたところなんだ

情報を読み進めた限りでは既にソフトは完成しており後は出荷など

の手續きが残るのみだそうだと

連斗「カプコン仕事はえーな」

腕がなまっちゃいけねーからな

俺が気を取り直し狩りの世界へと入ろうとした時だった

連斗母「連斗ー宅配便よー」

階下から母親の声が響く

つたく、いいとこだったのに

連斗「あーわかった、後で見るから」

俺はそう叫ぶと再びPCに向き直る

連斗母「なんかすごい大切そうな物ね」

ドアを開けながら母親が言った

連斗「おい！ノックぐらいしろよ！もうわかったから、それそこに

置いて出てってくれ！」

俺は何やらブツブツ言っている母親をさっさと部屋から追い出した

つたく、いつもこうだ

家族間にもプライバシーってもんはあるだろうが

再びゲームを始めようにも現物が目の前にあったのでは集中できない

連斗「つたく、何なんだよコレ」

ガサガサと乱暴に包装紙を剥がし中の段ボールを取り出す

連斗「差出・・・え・・・カプンコ!!?」

ラベルを読み上げた俺は驚愕した
なっ・・・

一体どうなってやる?

なんかの懸賞でも応募したか?

景品のあるイベントクエストなんてあったか?

連斗は必死に心当たりを見つけようとしたが無駄だった
わからない、間違いか?

いやでも宛先は・・・

俺だ

ゆつくりと段ボールを開ける

そこには

連斗「新モンスターハンター・・・?」

こ・・・これは・・・!

とつさにPC画面を振りかえる

”モンスターハンター新作発売決定!!!”

これだ・・・

これ以外には考えられなかった

な・・・なぜこれがここに!?

間違いではないようだし、ますますわけがわからない

俺は一瞬躊躇したがディスクを取り出すとPCに挿入し起動した

連斗「・・・」

”データを引き継ぎますか?”

このシリーズお馴染みの選択をせまられる

連斗「引き継ぎ・・・っ」と

”ゲームを始めますか?”

連斗「おうよ」

連斗ははやる気持ちをおさえ決定ボタンを押した

連斗「ん?いきなり密林から始まるのか・・・」

俺は慣れた手つきで次々とエリアを移動する

連斗「うお！？クイーンランゴスタ！？」

初期装備でいきなりボス級モンスターに出会ってはたまったもんではない

連斗「やばいやばい！」

俺はやつとの思いでキャンプまで逃げかえるとそこには一人のハンターがいた

連斗「ん？こいつは？」

ハンター「おい！」

連斗「何だ？」

ハンター「オレの支給品を！」

連斗「おいおい、何勘違いしてやがる、助けてくれよ」

思わず独り言が漏れるがこれは俺の癖である

もちろん会話をしているわけではなく俺は淡々と決定ボタンを押し会話を進めているだけだ

ハンター「お前ハンターか？」

連斗「おう」

ハンター「ならこの船に乗れ、俺の村に連れて行ってやる」

ははん、なるほど、こいつのいる村が今回の舞台ってわけか

連斗は何だか懐かしい気分だった

だが何が懐かしいのか、何が自分をそんな気分させるのかはわからなかった

どことなく気分のいいそれがそうさせたのか、期待で気分が高まったのかは分からないが彼はハッキリとした意志がこもった声で言った
連斗「いくぜ！俺の新たなハンターライフの始まりだ！！！」

W e l c o m e t o M o n s t e r H u n t e r ? - a n o t h e r

続・モンスターハンターへようこそ！　　くもう1つの物語く

ナオヤ「タオパイパイ？」

アッシ「ジンオウガだボケ、どこをどう間違ったらそうなるんだ」

アッシがナオヤにもっともな突っ込みを入れる

ベア「で、そのモンスターがどうしたって？」

ケン「それは僕が説明するよ」

受付のケンが割って入る

ケン「ここからはかなり離れた場所に生息していたモンスターなんだけど、最近になってマスク村の近辺でも目撃されるようになったんだ」

連斗「へーえ、で、俺たちにそいつを狩る依頼が来たってわけ？」

ケン「That's right」

ナオヤ「やってやろうじゃん？てめえの居場所ってやつを叩き込んでやんよ」

ナオヤがいきがる

ベア「うーん、一体どんなモンスターなんだい？」

オカ「そいつはわしが説明しよう」

村長のオカ・シモが割って入る

オカ「タオパイパイは・・・」

ケン「ジンオウガです」

オカ「ゲフンツ・・・ジンオウガは牙竜種といわれる種属でな、雷狼竜とも呼ばれておる」

連斗「そんなことはどうでもいい、対策を教えろ」

オカ「それは知らん」

連斗「なるほ・・・は？」

オカ「わしはハンターじゃないからな、それは自分たちで調べるのが筋ってもんじゃないろう」

俺の後ろでは村長に殴りかかろうとしているアッシをベアが必死になって抑え込んでいた

ケン「おっさんちよつと・・・」

ケンが村長を受付の裏に連れていく

ガシツボカツ

ケン「やあ、すまないね、改めて説明するよ」

爽やかな笑顔で再登場したケンが言った

ケン「雷狼竜という名前の通り、奴は放電能力を持っているんだ」

ベア「放電・・・」

ケン「うん、超帯電状態といわれる電気をまとった状態になった奴は何人たりとも止めることができないと聞くよ」

ナオヤ「ゴクリ・・・」

アッシ「雷をまとわせなければいいんだろう？」

ケン「まあそうなんだろうけど、これ以上は僕もわからないんだ」

連斗「十分だ、出発の準備に取り掛かるぞ」

こうして俺たちは各自解散し深夜のクエストに備えた

俺が弾を買いにアイテム屋へ向かう途中に通りがかったアッシの家からはこんがりと香ばしい匂いが漂ってきた

ベアの家からも光が漏れていたがアイツのことだ、武器の手入れをしているのだろう

俺は点検を済ませると仮眠を取るためベッドに横になった

そういえば、さっき武器屋の前を通りかかったらナオヤがゲリヨスの素材を片手に武器屋のミノ・ムラと言い争っていたがあれはなんだったんだろう

ナオヤ「ここが溪流か・・・幻想的だぜ」

頭だけゲリヨス装備のナオヤが言った

ベア「そうだね、でも景色に見とれている暇はないよ」

連斗「肉に見とれている奴はどうすんだ」

俺はこんがり肉を平らげているアッシを尻目に言った

アツシ「ハンマー使いなんだから当然だろ！」

ベアは呆れたような顔をしていた

ナオヤ「それにしても元々違う村の近辺にいたなら慣れているところのハンターに任せればいいのによ、えーと何て村だっけ、ゆ・・・」

アツシ「ユツケ村？」

連斗「肉から離れる」

俺はそう言い捨てるとキャンプを後にした

Thunder wolf dragon (前書き)

雷狼竜 — ジンオウガ —

Thunder wolf dragon

キャンプを出るとそこには透き通るような夜空の下、小さな滝と多くの動植物たちが存在した

天空には星たちが輝き、俺の喉には爽やかな空気が吹き抜ける

ベア「のどかだねえ」

アッシ「わざわざ緊急依頼をさせるようなモンスターがいるとは思えんな」

まったくだ

連斗「だが油断は禁物だ、さっさと行くぞ」

俺はそういうと先頭を切ってエリア4へと向かった

ナオヤ「何これ家？」

そこには廃屋と言ったほうが相応しいであろう朽ちた建築物があったベア「かなり昔に人が住んでいたようだね」

アッシ「モンスターが多くて移住したってところか」

ナオヤ「ヘーどうでもいいわ、そんなことより俺はキノコ探してくる」

ナオヤはそう言うエリア5へと続く坂道を駆けて行った

連斗「おっおい！」

俺たちも慌てて後を追う

あいつを1人にしたらどうなるか分かったもんじゃないからな

エリア5はエリア4と打って変わり植物の多く茂っているエリアだった

その奥には見慣れないモンスターがいた

ナオヤ「ん？」

ベア「あいつが・・・」

アッシ「ジンオウガか！」

俺は勢いよくボウガンを構え装填した

ナオヤ「いくぞ！」

ナオヤがいきなり走り出す

アッシ「ったく、毎回最初だけは勢いあるんだよな」

そういうとアッシはナオヤの後に続いた

ベア「援護よろしく」

ベアもそう言々と走り出す

ナオヤ「すねっ」

ジンオウガの右前脚にナオヤの大剣の縦斬りが炸裂する

アッシ「めしっ」

ベア「せいっゆっ」

アッシのハンマーの溜め3、ベアの片手剣の連激も続く

ギヤーン

さすがのジンオウガもこれは堪えたのかバックステップで逃げる

しかしそれも無駄なことだ

ガンナーの俺がいるからだ

俺はすかさず貫通弾をジンオウガに撃ち込む

連斗「くるばあ！」

ブオンッ

その時ジンオウガが一回転した

それと同時に2つの雷弾が弧を描いてフィールドを駆け巡る

ベア「ぐっ」

ベアはすかさずそれをガード

アッシ「ふん」

雷弾アッシには当たらずにスルーしていった

ナオヤ「ばりっ」

ナオヤは・・・

よかった、死んではいないな

俺は遠くに吹っ飛んだナオヤの安否を確認すると再び貫通弾を装填

しジンオウガに照準を合わせた

ナオヤ「あぶねえ、しかし相手はかなり動きがノロいな、この勝負もらった！」

ナオヤはすかさず回復薬を飲み干すと再びジンオウガの元へと向かった

俺は思った

確かにジンオウガの動きはかなり遅い

冷静に戦えばこのまま圧勝だろう

他の村のモンスターなんてこんな物なのか

その時だった

ギヤアンギヤアンギヤアン

ジンオウガが静止したかと思うと何やらうめき声を上げ始めた

気のせいかなその周りは微かに輝き、まるで光がジンオウガの元へと集まって行くようだった

ナオヤ「はーん！止まりやがって馬鹿め！」

ナオヤがすかさず溜め動作に入る

アッシとベアも攻撃するが明らかにおかしいこの動作に警戒してか手数は少なめだった

それもつかの間ジンオウガは再び行動を開始した

スローな動作で地面を殴る行為を繰り返す

そのたびに地面は大きくへこむことからダメージはあるようだがあの速さではいくらナオヤでも当たる事はないだろう

アッシ「ふん、隙の多いやつだ！」

ベア「もしかして他の村のハンターと比べて僕たちが強すぎるのかな？」

アッシとベアは完璧にジンオウガの動きを見切ったらしくシヨルダ―タツクルや突進などを交わし連続攻撃を繰り返している

ナオヤもそれにならい安定した攻撃を与えている

連斗「思ったより楽なクエストだったな」

俺が貫通弾を打ち出しながら既にクエストが終わったような気分だった時だった

ギヤアンギヤアンギヤアン

ジンオウガが再び静止し光をまとい始めた

ナオヤ「はんっ！まぬけが！どりゃあああ！！！」

アッシ「びびんっばあっ！」

ベア「ぱしっりっ」

ナオヤとアッシとベア

それぞれが連続攻撃をお見舞いする

しかしあの動作は一体

ん？

確かケンが雷をまとうと言っていたが

あれが・・・！

あれは超帯電状態になる為の予備動作に違いない！

俺が攻撃を続ける3人にこれを知らせようと走り出した時だった

ビシャアーーーーーン

まるでそれはジノオウガに雷が落ちたようだった

ジノオウガの周りの木々が縦に裂け地面がえぐれた

ナオヤが吹き飛ばされ裂けた木にぶち当たる

アッシは地面を十数メートル以上回転しながら吹っ飛んでいく

ベアは肢体をばたつかせ空中を舞っていた

それらを尻目にジノオウガは俺を見据えた

目が合った

そこにあつた殺気に触れて始めて俺は理解した

舐めていたと

俺はナオヤを運ぶ為のアイルーが現れたのを確認すると粉塵を取り

出し飲み干した

そしてジノオウガを指差し叫んだ

連斗「戦いはこれからだぜ！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0406o/>

続・モンスターハンターへようこそ！

2011年10月12日14時13分発行